

平成23年度
日本文化演習
報告書

北海学園大学人文学部日本文化学科

日本文化の古層

—『日本文化演習報告書』発行に寄せて—

人文学部長 安酸 敏眞

人間は自然の必然に従属しつつ、それを超越する自由を兼ね備えた精神的存在であり、自然に働きかけて人間らしい世界を創造します。これが人間に特有な文化というものであります。わたしたちはみな特定の文化のなかに生を享け、その文化を受容しながら自己を形成します。「人間は文化的な動物である」（キケロ）と言われる所以ですが、すべての歴史的文化には必ずその源流とその後の展開があります。日本文化もその例外ではありません。

現代の日本文化は明治維新以後の近代化=西洋化の圧倒的影響下にあり、首都東京はまさにそのシンボリックな存在です。しかしそれ以前の千数百年の長きにわたって、日本の中心は京都・奈良・大阪という地域にありました。実際、そこには明治以後の日本文化とは大いに異なる、いわば《日本文化の古層》が悠久の時の流れを耐え抜いて、しかも近代文化と見事に融合しながら、いまでもしっかりと息づいています。わが国を訪れる多くの外国人観光客が、西洋的な近代都市の風貌をした東京ではなく、むしろ日本人の共通の心の故郷ともいるべき京都や奈良に惹かれるのも、実によく理解できるところです。

もちろん、わずか5泊6日の研修旅行では、京都や奈良のごく一部分しか体験できません。しかしこの地を訪れて自分の眼で文化遺産を見学し、自分の肌で歴史と伝統の一端に触ることは、自國文化たる日本文化を再考し、ひいてはみずからの存在のありかを探求する絶好の機会となるでしょう。インターネットが発達した現代では、あらゆるもの宅でバーチャルに体験できますが、それにもかかわらず、何人の学生が記しているように、まさに「百聞は一見にしかず」です。現地の空気を吸い、新鮮なあるいは懐かしい臭いをかぎながら、自分の足で歩き回り、そこに生きる人々と直に接することほど、文化理解に役立つことはありません。「日本文化演習」が企画された趣旨はそこにあります。

わたし自身は四十数年前に山陰の小邑から上洛し、18歳から28歳までの十年間を京都で過ごしました。京都の神社仏閣はもとより、それこそ和辻哲郎の『古寺巡礼』を片手に、奈良方面のお寺も巡り歩きました。ここに収録されている学生たちの研修報告を読みながらタイムスリップして、いつしか自分も一緒に旅行している錯覚にとらわれました。金閣寺、銀閣寺、三十三間堂、広隆寺の弥勒菩薩像、龍安寺の石庭、嵯峨野の竹林、南禅寺、哲学の道、詩仙堂、定家ゆかりの常寂光寺、新撰組が陣を張っていた壬生界隈など、これらすべてはわたしの青春の思い出のスポットですが、この報告書を通じて学生時代に舞い戻った気分になりました。皆様方も是非そのような古都探索をお楽しみください。

最後に、この研修旅行に参加した学生たちが、今回の研修体験を踏まえて今後より深く日本文化を学んでくれることを念じてやみません。

平城宮跡
朱雀門前で



黄檗山萬福寺の見学





重要伝統的建造物群
保存地区・伊根町の
舟屋群を背に



国立民族学博物館で
講師の齋藤玲子氏に
展示の説明を受ける

故きを温ね新しきを知る演習旅行

教務委員 手塚 薫

平成23年度の第9回日本文化演習は、平成24年2月20日(月)から25日(土)まで5泊6日間の日程で、奈良・京都・大阪方面で実施されました。参加者は1部29名、2部8名に留学生3名を加えた総勢40名の学生諸君でした。引率には、郡司淳、徳永良次、中川かず子、手塚の4名があたりました。期間中は丹後半島に向かうバスの中で一時的に雨に遭遇したもののそれ以外は概ね天気に恵まれました。陸路の渋滞もなく飛行機の運航もほぼ予定通りであり、全期間を通じ大きなトラブルもなく無事に演習を終えることができました。今回の研修日程は以下の通りです。

- 第1日 新千歳空港—関西空港—団体研修：大神神社・崇峻天皇陵
- 第2日 団体研修：大極殿・平城京跡資料館・平等院鳳凰堂・黄檗山萬福寺
- 第3日 自主研修
- 第4日 団体研修：丹後半島・伊根町一天橋立（元伊勢籠神社・傘松公園）
- 第5日 自主研修
- 第6日 団体研修：国立民族学博物館・万博記念公園—関西空港—新千歳空港

昨年の12月には引率教員4名がそれぞれガイダンスと講義を実施し、現地で何をどのように理解すべきかの専門的な事前指導を行いました。これらを踏まえて受講生は自主研修時の詳細な計画を立て、事前レポートの形で提出しました。

昨年より人数が減ってバス1台におさまったとはいえ、待ちに待った自主研修日を含め、教科書でおなじみの日本史の重要な舞台となった名所・旧跡を自らの足で歩き、また日本の伝統的な美や風土に直に触れることによって日本の歴史や文化についての認識をより深めることができたとの感想が多く寄せられています。

初めて参加した私にとっても、ふだんの講義の緊張から解き放たれ、大阪で開かれた万国博覧会以後に生まれた学生たちと世代の差を感じながらも共に汗をかきながら研修を楽しむ機会となりました。

なお本年度より、人文学部のFDの一環として、野外実習の唯一の機会である日本文化演習の教育効果を高め、さらにその成果を日本文化学科全体の授業改善に生かすため、新たに研修旅行後に学生が提出するレポートを『日本文化演習報告書』と題して刊行し、共同の成果として教員・学生に問うことになりました。レポートの掲載にあたっては、体裁を整える必要から表記の統一など最低限の手直しを行いましたことを申し添えます。

目次

●文学から京都を知る旅	旭 史裕	1	●嵐山の天龍寺、竹林	平野 榛	37
●古都の日本文化を巡る	淡路 実里	3	●文化遺産と生活の共存	福井 智史	39
●さまざまな趣を持つ町、京都	板垣 舞	5	●伏見稻荷大社で感じた歴史と文化	藤嶋 ゆに	41
●京の寺庭を探訪して	大谷 絵理	7	●伝統と歴史の街「京都」	藤光 賢大	43
●日本人のアイデンティティを感じる旅	大西 華奈	9	●美の象徴「金閣寺」	松尾 結	45
●二つの寺の天井図	大家菜都美	11	●関西での収穫	三浦 莉奈	47
●新選組の故郷“八木邸”を訪ねて	海藤 梓	13	●みんぱくに見るリアル	三村 知世	49
●古都を巡って	加藤 太一	15	●京都を中心に、関西で学んだ日本的心	矢野 倭奈	51
●清水界隈を歩く	加藤 茂実	17	●本と世界を学ぶ	吉田 茜	53
●神道を見る	倉田 一輝	19	●京都の飲料に関する文化	吉田 智哉	55
●京都・奈良を歩いて日本文化を考える	佐久間 拓	21	●私が感心したこと	渡辺 航平	57
●『壬生義士伝』の「義」を探る	佐々木 緑	23	●「古都」京都の「今」	井上 優太	59
●三十三間堂を通して見る日本の仏教文化	菅原 千晴	25	●神戸の魅力	江川愛也音	61
●京都らしい光景	館石 駿	27	●文化に触れる6日間	沖本 和恵	63
●異端絵画	塚田 秀基	29	●一人旅を楽しむ	樋口 明香	65
●庭園を歩く	中崎 翔太	31	●自分の足で見て周る京都	山内 愛生	67
●過去と現在の調和	橋田恵利香	33	●三十三間堂拝観記	青山 瑞紀	69
●偉人が残したもの	波連早恵子	35	●京都宇治茶	植木 文佳	71
			●鳥居の群れとカタルシス	長岡 真司	73

文学から京都を知る旅

1部 日本文化学科
2年J1組 2710101 旭 史裕

2月20日から25日にかけての関西研修旅行は正に日本を知る旅であった。崇神天皇の古墳から、伊根の舟屋群までいくつもの時代をまたぎ日本の文化を学び、さらに国立民族学博物館では日本だけではなく世界を知ることもでき、非常に有意義なものであった。

自主研修の二日とも、私は一人で京都を巡った。一人で知らない土地を旅することにとてもわくわくしたし、自由に見て回ることができて楽しかった。

自主研修での私のテーマは文学作品に登場する京都を見て回ることであった。多くの作家が京都を舞台にして作品を書いているが、今回私は一人の作家に絞って作品に登場する京都の神社や街を見学に行った。その作家とは森見登美彦である。森見登美彦の作品のはとんどは京都が舞台であり、実際に京都を歩かなくてはわからないような場所も出てきて面白い。読んでいるうちに京都を歩いてみたい気持ちが強くなった。作品に登場する京都を見て回ることで、京都の素晴らしさ及び作品の素晴らしさを感じることを研修の目的とした。

見学した場所のうち、最も印象に残ったのは下鴨神社（賀茂御祖神社）だった。森見登美彦の作品では古本まつりが行われている様子がよく書かれている。下鴨神社には朝早く見学に行き、私は敷地内に入った瞬間からその静けさに心奪われた。奥に歩いていけばいくほど車などの騒音は遠ざかり、鳥の声や川のせせらぎだけが聞こえるようになった。糺の森の中に入ると、とても神聖な場所のように感じられた。だが、ふと境内を見ると、学校へ行く子供たちや通勤する人たち、しばらくすると幼稚園か保育園の子供たちが保護者に連れられてやってきて、京都の人々にとってはこの神社が生活の一部であるのがよくわかった。夏には古本まつりが開催されることからも人々に愛されている神社であることが理解できる。



神社といえば、もう一つどうしても行きたかった神社があった。伏見稻荷大社である。テレビや本で見るいくつもの鳥居が並んでいるのをぜひこの目で確かめたかった。夜遅くに行ったため、全てを見学することは叶わなかったが、わずかな明かりの中、千本鳥居を



歩いているときはどこか別の世界に迷い込んだような感覚に陥った。帰れなくなるような気にさえなったが、帰り道再び鳥居をよく見るといくつもの名前が彫られていて、やはりここも人々の力によって今に残っているのだと思った。

そのほかにも、京都大学の近くの吉田神社やいくつか神社を見たが、そのどこも人々に愛されしっかりとその生活の中に根付いているのがうかがえた。

また、気になったのは鴨川に架かる橋である。いくつもの橋があるが、そのどれもが違う造りをしているのが興味深かった。その中でも特に印象に残ったのは賀茂大橋である。賀茂大橋の欄干は、夜になると明かりが灯り、とても風情のある趣になる。橋の一つ一つにまで気遣いを怠らない京都の素晴らしいしさを知った。

今回の研修旅行では、徒歩だけではなく、地下鉄・バス・電車とあらゆる交通手段で京都を見て回ることができ、一人旅としても大変楽しいものであった。

何度も行きたくなる京都。私は、その魅力にとりつかれてしまった。



古都の日本文化を巡る —社を守る狛犬—

1部 日本文化学科
2年J1組 2710102 淡路 実里

2月に参加した日本文化演習の研修旅行は、日本の古都である奈良・京都での5泊6日の旅だった。大学の講義を聞くだけでは知り得なかった「日本文化」の質感を感じ、目にし、触れることのできた研修旅行だったと思う。

6日間の日程の中で、2日は自主研修で、個人が自由に計画を立て、各地を巡ることができた。私は友人と共にそれぞれ銀閣寺・金閣寺周辺と三十三間堂・伏見稻荷大社周辺を巡った。高校の修学旅行で行くことのできなかった銀閣寺と三十三間堂を見学することができ、今回の研修旅行での目標の一つだったので、達成することができたのは感慨深かった。銀閣寺は金閣寺と比べてみると、落ち着きのある雰囲気で、周りの自然とよく調和している感じがした。三十三間堂では、1,001体の千手観音像と二十八部衆像がずらりと立ち並ぶ光景に圧倒され、言葉を失ってしまった。像の目がまるで本物のようで、全ての像に凝視され、心を見透かされているような緊張を覚えた。

併せて、私は「境界」というものに関心を持っており、研修旅行の中でも境界を探しながら各地を見学していた。主として、神域と俗世を隔てる境界だと私が考える「鳥居」を探索し、数多くの鳥居を写真に収めることができた。各地の鳥居の写真を見返してみると、多くの鳥居の前に狛犬があることに気付く。魔除けとして社を守る狛犬は、一対の阿吽の口をした獅子に似た獣などと言われる。多くの神社で獅子に似た獣つまり狛犬を見たが、私は研修旅行の中で一風変わった狛犬を見つけることができた。

まずは大豊神社にある狛鼠である。狛鼠があるということをバスガイドの方が仰っていたのを聞き、自主研修で銀閣寺周辺を散策する予定であった私は、哲学の道を南下し、大豊神社を訪ねてみた。大豊神社の境内の中にある末社の一つ、大国社の前には狛鼠が狛犬と同様に阿吽の口をして向かい合っていた。大国主命を助けたという言い伝えから建てられた狛鼠は、何とも愛らしい姿で、子年になると注



大豊神社の狛鼠（左）



同神社の狛鼠（右）

目を浴びるのだそうだ。境内には他にも末社があり、稻荷社には狛狐、日吉社には驚くことに狛猿と狛鳶があった。

全国に約3万社ある稻荷神社の総本宮である伏見稻荷大社にも、言うまでもなく狛狐がある。狐は伏見稻荷大社に祀られる稻荷大神様の使いとされ、狛狐として社を守っていた。伏見稻荷大社と言えば、約1万基の朱塗りの鳥居が立ち並ぶ光景が有名である。鳥居が多くあるのは、願い事が「通る」あるいは「通った」というお礼の意味から鳥居を奉納するという習慣が江戸時代に始まったためだとされる。鳥居を探索していた私としては、その光景を間近にできたことが非常に嬉しかった。鳥居の道に入り込めば朱の世界。進んだ先は一体何処へ繋がっているのか。鳥居の隙間から見える森が何処か神秘的に見え、不思議な気持ちで参道を歩いた。

稻荷社に関連して、元伊勢といわれる籠神社の境内にある末社の真名井稻荷神社の前には、詳しい由来は分からぬが、狛狐ではなく狛龍がある。また、籠神社には重要文化財となっている魔除け狛犬がある。

京都で宿泊したザ・パレスサイドホテルの近くには、和氣清麻呂公命と和氣広虫姫命を祀る護王神社があった。ここには狛猪がある。平安時代初期に編纂さ



護王神社の狛猪（左）



同神社の狛猪（右）

れた勅撰史書である『日本後紀』に和氣清麻呂が京から宇佐へと向かう際に災難に遭ったが、300頭の猪が現れ、清麻呂を守ったという言い伝えがあることから、清麻呂を祭神とする当社には狛犬ではなく狛猪をという崇敬者の声によって境内に靈猪像、つまり狛猪が奉納されたのだという。

どのような姿であろうと、狛犬たちは、魔が集まりやすい神域と俗世の境界である鳥居の前で社を守っていた。上記のように、京都の中だけでも様々な生き物が狛犬として社の前に建てられていた。日本中を探せば、他にも違った生き物の狛犬があるのだろうか。今後、旅行などで神社を見かけたら、是非とも注目してみたいと思う。

6日間の日程は非常に内容が詰まったものだったため、あっという間に時間が過ぎてしまったという印象だった。毎日、新鮮な「日本文化」を間近にすることことができたことと、フィールドワークの大切さと面白さを学べたことが、今回の研修旅行に参加して得られた体験と発見であったと思う。教室で聞く講義の中でも発見はあるが、自ら足を運んで直接得た発見というものは、やはり感動も一入である。研修旅行で得た経験と発見を活かし、今後の学びに繋げていきたいと思う。

さまざまな趣を持つ町、京都

1部 日本文化学科
2年J1組 2710105 板垣 舞

今回、日本文化演習に参加することにより、日本文化とは何かという普段あまり意識することのない問題について、深く考える機会を持つことが出来た。5泊6日という日程は、出発する前はとても長く感じ、無事に終えられるのかどうかという不安が多分にあった。しかし、実際に旅行が始まると、不安など感じる隙のないほど密度の濃い時間の連続であった。

世界最古の神社である大神神社の参拝、日本三景のひとつである天橋立の見学、広大な敷地を有する平城宮跡地の散策などとても盛りだくさんな旅であり、それぞれの場所に様々な思い出を残すことが出来た。どれを取っても印象に残るものばかりであったが、特



筆すべきはやはり二日間の自主研修についてである。

二日間あった自主研修のうち、一日目は大阪へ足を伸ばし、二日目には主に京都市内の観光名所を見学して回った。団体研修では、京都の郊外を中心に見学する旨を事前に聞いていたので、自主研修では市内を回ろうと考えたからである。朝から日が沈み暗くなるまでに、金閣寺・清水寺・六波羅蜜寺・三十三間堂の四つの史跡を見学した。これらは、そのほとんどが高校の修学旅行で京都を訪れた際に一度見たことのあるものである。高校生の時に見た印象と、日本文化学科に所属する学生として見た印象とでは、どれほどの違いがあるのか大変興味があった。

四つの史跡の中で、もっとも充実した時間を過ごすことが出来たのは三十三間堂である。千体もの觀音像が、整然と屹立している様は、見る者を圧倒する雰囲気を醸し出していた。高校の修学旅行で訪れた際にも感動はしたが、仏像がたくさんあってすごいという程度の感想しか持ち合わせてていなかった。しかし、今回は当時とは違った角度で見学することが出来た。

三十三間堂を見学していちばん印象に残ったのは、觀音像の顔や立ち姿が一体一体微妙に異なることである。千体の觀音像のうち約五百体には作者名が残されているそうだが、

運慶・快慶が属した慶派や院派、円派などの団体が集団で造仏に携わっている。機械ではなく様々な人間の手を介して作り出されたものなのだから、それぞれ微妙に表情が異なるのは当たり前のことではある。しかし、ただ漫然と見るのみで終わってしまった高校の修学旅行ではそのことに気付くことが出来なかった。非常にもったいないことをしたと思う。以前に見た際とは違った新しい発見をすることが出来たのは、大きな収穫であった。



また、もう一つ印象に残ったのは、堂内の両端に据えられていた、雷神と風神像である。観音像が柔軟な顔立ちをしているのに対して、この二つの像はとても力強く莊厳な佇まいをみせていた。その対比がとても印象深く、興味深くもあった。数多の観音像とは別に、趣向の異なる神像を配置することで、見る者を飽きさせない効果をもたらしていた。

一度訪れたことのある場所でも、前回とは違った発見をすることが可能なのだということを今回の研修旅行で学んだ。京都は、その時々で訪れる者に違った印象を与える場所であり、もう一度訪れたらまた新しい発見や感想があるのだろうと思った。この日本文化演習での体験を糧に、再び京都を旅してみたいと思う。その際にはどんな発見があるのか、非常に楽しみである。

京の寺庭を探訪して

1部 日本文化学科
2年J1組 2710117 大谷 納理

梅の花がその固い蕾を緩めんとする、2月の京都。北海道ほどではないもののその寒さは身に染みるものがあり、京の町を巡る私の体を強張らせる。ダッフルコートを素通りして、体の奥を貫くような冷気に凍えながら、目的地へと向かうバスに乗り込む。間に合つたことに安堵し、到着に向けて胸を躍らせる。そんな私を待っていたのは、美しく、そして厳かな寺庭であった。

神社を数社見学した後、最初にたどり着いた寺はかの金閣寺であった。その池に己の姿を映しつつ、黄金に輝く姿人々は心奪われ、日本国外から多くの観光客が訪れる金閣寺。その黄金の国・日本を象徴するが如き輝きは人々の心に印象深く残ることであろう。しかし、そのせいで金閣寺では建物しか印象に残らなかったという人も結構な数に上るのではないだろうか。確かにメインは建物ではあるが、境内にはそれ以外の、美しい魅力の数々が存在するのだ。

たとえば、金閣寺を眺めたあとの道にある、龍門瀑の鯉魚石。白く輝く滝水が、その下にある石に降りかかる。石の輪郭に沿って浮かび上がる白い飛沫が、まるでオーラのように感じられた。やや不思議な配置に感じられるだろうが、実は、この滝と石の組み合わせは、滝を昇り龍にならんとする鯉、つまり登龍門の故事になぞらえて作られたものなのだ。ちなみにこのような鯉魚石は、西芳寺や天龍寺にも存在する。



次に訪れたのは、日本庭園を代表する石庭を有する龍安寺である。寺全体を包み込む冬の冷気とも相まって、張りつめた厳かさと静かな雰囲気を感じられる日であった。石庭ばかりが有名ではあるが、苔と木によって全体的に美しく落ち着いた緑の風景が広がり、森林浴にもうってつけの場所であった。春や秋になればまたこの風景も違った味を見せるのだと思うと、また来なければ、という気持ちに駆られる。

しかし、龍安寺といえばやはり石庭である。メインのものより周りの風景ばかり撮ってしまう性格の私だが、この石庭には心奪われざるを得なかった。こちらは外の広い林とは打って変わって、まさに箱庭、といった感じの、小ぢんまりとしたものである。この箱庭

に面した縁側から撮影を試みたのだが、なかなか全体を写すことができない。カメラの画面のサイズの関係もあるのだが、実はこの石庭の設計に特徴があり、15個ある石をすべて写す、あるいは見ることが、上空以外からは不可能な設計になっているのだ。この理由として、人が不完全な存在であるとの戒めという説がある。また、この庭全体が表しているものについても諸説あり、雲海に突き出た山々、空飛ぶ龍などさまざまである。その中でも「虎の子渡し」説がよく話題にされるものである。その説とは、虎の産んだ三匹の子の一匹が豹で、残り二匹の子を食べようとしている。この状況で川を渡る場合、母虎がどうするべきかを石が指示している、というものである。

そして自主研修2日目、1日目よりは暖かく天気のよい日ではあったが、相変わらずの寒さである。そんなこの日のメインは銀閣寺、1日目の金閣寺とよく比較される場所である。しかし、金閣寺と銀閣寺ではいわばセールスポイントが全く異なり、金閣が栄華や黄金の国の象徴ならば、銀閣はわびさびの象徴である。苔寺・西芳寺の流れを組む、苔に覆われた地面が、私たちの視界を美しい緑に染めていく。



そんな自然をこの身に感じることができる銀閣寺であるが、庭の中には白銀色に光る、一際目を引く場所がある。円錐型の盛砂・向月台（左写真の右奥）と砂が平たく盛られた場所・銀沙灘である。全体的に日本の古庭園といった雰囲気を持った銀閣寺の中で、この二つは場違いで、銀閣寺の風景を思い起こそうとした時、しっかりと思い出しができるであろう。この二つが作られた時期も理由もはっきりしておらず、銀沙灘については、足利義政が月見の宴の際に月光を反射させるために作ったという説や、江戸時代に池の底をさらった砂を方丈前に盛ったという説などがある。

京都の旅は決して天候に恵まれた旅ではなかった。だが、天候の悪さなど気にならないくらい、得るものがあったと思う。京都の寺の庭は、普段の生活では出会えない、ある種の空気を持っていた。京都全体に言えることであるが、そこには昔の日本の魂が宿っていた。石や苔、木や水など、自然を生かした美こそが日本の真髄だと、寺の庭の数々を見て感じたのである。寺庭は「日本らしさ」を体現しているといっても過言ではない、と私は感じた。「ああ、日本ってこうだよな！」と、美しい庭を見るたび、私は心の底から湧きあがる感動に身を震わせた。

参考文献：田中照三『とっておきの庭案内』2007年、小学館

日本人のアイデンティティを感じる旅

1部 日本文化学科
2年J1組 2710119 大西 華奈

今回、研修旅行に参加し、日本という国の文化に改めて興味と関心を抱くことができ、とても有意義な日本文化演習となった。団体研修初日に訪れた大神神社と崇神天皇陵、二日目の平等院と黄檗宗萬福寺、三日目の伊根の舟屋群と天橋立、そして最終日の国立民族学博物館など興味深い見学先ばかりで、宗教や建築、生活といった様々な形の日本文化に浸ることのできた5泊6日であった。

研修旅行に参加してみて感じたのは、日本人のアイデンティティや芸術に対する美学の根幹といったものはやはり京都や奈良といった都から、また宗教をルーツとして発生したものなのだとということである。生粋の道産子である私が京都の寺社などに行くと妙に感慨深くなるのもそのためなのである。特に今回は自主研修の日程を利用し様々な寺社、多くは禅寺を訪れ、日本固有の美意識である「侘び」「寂び」や日本の芸術の素晴らしさを身を持って実感できたように思う。

龍安寺の石庭はまさに侘び寂びの代名詞ともいえるものだろう。15の石が方丈のどの位置から見ても一度にすべての石を見ることが叶わないように配置されており、その意味は未だに解明されていないという。見る者の自由な解釈が可能な点が龍安寺の石庭をより魅力的にしているのかもしれない。また石庭を囲む堀は、菜種油を混ぜて作られた油土堀であり、時代によってそ



龍安寺 石庭

の趣を変えるようだ。私は長年この石庭を訪れるることを望んでいたため、石庭を目の前にした時の感動は一入のものであった。方丈から立って眺めると思っていたよりも土壇が低く感じられたが、縁側に座り庭を眺めると真っ白に広がる砂と象徴的に配置されている石たちによる禅の傑作とも言われている美しい石庭が眼前いっぱいに広がり、思わずため息が出るほど感激した。何時間でも居座って石庭を眺めていたいと思わせる魅力や穏やかさがそこにはあった。このような石庭は方丈の、石庭に面している部屋の中心から眺めることを考え設計されているものがほとんどである。叶うならば部屋の中心から眺めてみたいと思うのも無理はないだろう。周囲からは鏡容池から聞こえてくる水音や鳥たちの囀りが聞こえてくるだけの清閑な方丈は人々に穏やかな時間の流れを感じさせ、禅で求められる

心の無を得るのには最適な環境であるといえよう。方丈の縁側に座り無心に石庭を眺める贅沢は、どの時代のどこの日本人にとっても共通するものであり、日本人のアイデンティティの根幹に響くものであるといえるだろう。

また芸術という点で圧倒的な印象を受けたのは妙心寺の法堂の天井に描かれている狩野探幽の雲龍図である。研修では今年が辰年ということもあり様々な龍の図、また龍にまつわる寺院を訪れ、建仁寺の小泉淳作の双龍図、南禪寺の今尾景年の雲龍図や萬福寺の龍を模した伽藍などを拝観してきた。その中でも圧倒的な存在感を放っていたのが妙心寺の雲龍図であった。禪宗の法堂の天井は板が一面に張られており平らなため鏡天井とも呼ばれ、そこには丸龍が描かれるならわしがあるという。地上で描かれ吊り上げることから「吊り天井」とも呼ばれているとガイドさんが語ってくれた。狩野探幽は55歳の時から8年の歳月をかけこの雲龍図を完成させたという。龍の眼は円の中心に描かれているためどの位置、角度から見ても龍の眼と目が合うことから「八方にらみの龍」とも呼ばれているそうだ。実際に法堂の中を龍と目をあわせて歩いてみたが、常に龍に睨みつけられているように見え背筋が伸びるような緊張感を感じた。またこの雲龍図は見る角度から「登り竜」にも「下り竜」にも見え、視点を変えることによって様々にその姿を変える。宗教美術は信仰の対象であるため、そこには尊さや恐怖を感じさせるような迫力がある。この雲龍図は法堂を守護するものとしての神聖さと人々に恐怖を与える迫力を有しており、法堂に立ち入った私を圧倒した。日本の芸術において、龍などといった生物が描かれているものの多くは力強く生命力を感じさせる迫力と生き物ならではの繊細さを併せ持っている。力強さ



妙心寺法堂（この天井に雲龍図がある）

と繊細さという相反する二つの要素を持っていることが日本の芸術の最大の魅力であり、日本の人々のみならず海外の人々をも魅了している要因だろう。妙心寺の法堂内は撮影禁止なため、雲龍図の写真を残すことはできなかった。しかしこの雲龍図は直に肉眼で見ることにこそ意義があるものであるとはっきり言える。近くに行くことがあれば是非訪れてほしい場所である。

そのほかにも、鹿苑寺金閣や慈照寺銀閣、北野天満宮、八坂神社、南禪寺、建仁寺、仁和寺、知恩院など様々な寺社を訪れ、日本人のアイデンティティのルーツを感じることができたように思う。北野天満宮では北海道ではあまり見かけない梅を見ることができ、古代で愛でられた花を同じように愛でることでその当時に思いをはせることができた。また京都三大門である仁和寺、知恩院、南禪寺の三門を巡り歩き、その建築物の巨大さや荘厳さを目の当たりにすることで日本の建築文化の素晴らしさを知ることができた。この日本文化演習という機会を、今後日本人らしさを考えていくための糧となるとても有意義なものにすることができ、私自身とても満足している。

二つの寺の天井図

1部 日本文化学科
2年J1組 2710120 大家菜都美

今回の日本文化演習では、奈良・京都の様々な文化や歴史に触れることができ、大変有意義な時間を過ごすことが出来たと感じている。

団体研修では、伊根の舟屋群がとても心に残っている。実際に訪れるまでは同じ日の見学先である天橋立のほうに興味があり、正直舟屋郡にはあまり関心を持っていなかった。しかし、実際行ってみてみると、舟屋群の構造や漁業とともに生きてきた伊根の人々の歴史は、想像以上に興味深いものであった。研修を終えた今となっては天橋立よりも印象に残る土地になった。

ほかにも伊根や天橋立に向かう道中の景色は、私の持っていた京都のイメージとは異なるものであり、私が知っているのは京都市内ばかりで、京都市以外は意外と知らないことを思い知らされた。

自主研修ではテーマなどは決めず、興味のあるところを重点的に回った。その中でも印象に残っているのは龍の天井図である。この自主研修中に建仁寺と妙心寺の二つの寺で龍を見学した。

建仁寺は京都最古の禅寺である。国宝の風神雷神図屏風があることでも知られている。この寺の法堂にある天井画「双龍図」は2002年に創建800年を記念して小泉淳作氏によって描かれたものである。新しいものではあるが、新しいがゆえに描線がはっきりしており、迫力は相当なものであった。ほかには襖絵の雲竜図も拝観することができた。天井図のほうの龍は鱗やしわなどがしっかりと描かれていたのに対し、襖絵のほうは鱗などそれほどしっかりと描かれておらず、全体のバランスや顔の表情や濃淡に目が行くような作品であったので、一つの寺で二つの異なった龍を見ることが出来てよかったです。



しかし一番心に残っているのは妙心寺の「雲竜図」である。妙心寺とは日本最大の禅寺である。黄鐘調の鐘として有名な梵鐘は国宝である。重要文化財である浴室は通称明知風呂と呼ばれており、明智光秀を供養するために作られたものである。この寺の法堂にある天井画「雲竜図」は狩野探幽によって描かれたものである。見る方向によっては下り龍が

昇り龍になるというものである。この龍を見たときに私は本当に圧倒された。法堂の天井は高く雲竜図までも結構な距離があるのだが、その距離を感じさせないほどに、龍の絵は圧倒的であり、迫ってくるようであった。建仁寺の天井図ほど細かく描かれているわけではないのだが、一目見たときの迫力や雰囲気は妙心寺の雲竜図のほうが独特なものがあった。妙心寺ではガイドさんによって絵の見方や意味なども丁寧に教えて頂き、更に絵の意味や歴史を感じることが出来た。12年に一度しかこない辰年の今年に龍を見に来られたことは本当に幸運であり、記憶に残る出来事となった。



この日本文化演習では、自分の興味・関心のあるところを訪問したことはもちろんすばらしいことであったが、自分が計画する旅行では決して行かないようなところにも行くことが出来たという点で良い経験になったと思う。

今回見聞きした様々なことを、今後の活動や勉強に生かしていくら良いと考えている。

新選組の故郷 “八木邸” を訪ねて

1部 日本文化学科
2年J1組 2710123 海藤 桧

壬生一現在は京都市中京区に位置するこの地は、幕末にはかの新選組が拠点地として活躍していた地でもある。自主研修一日目である2月22日、私は自ら“新選組を巡る旅”と称し、この地に足を踏み入れてみた。本当は旅の一部始終を書き綴りたいものではあるが、今回はページの制限上、あえて新選組初期屯所“八木邸”的みを取り上げて紹介したい。

大宮駅を下車し、商店街を地図通りに5分ほど歩く。そしてコンビニ脇の小路地を右に折れた時である。細い路地の両面を昔ながらの日本家屋や小さな寺社が囲う——まさに幕末の京都を絵に描いたような光景が眼前に広がった。かつて新選組の隊士達もこの光景の中を駆けずり回っていたのだろう、そんな思いをはせながら私も八木邸に向けて歩を進めしていく。新選組の定番の幟があちこちに見え始めた頃だろう、やっと目的地が眼前に現る。

ここ八木邸は、清川八郎率いる浪士組が將軍上洛警護の目的で江戸から京に上了際、宿舎として使われた建物のうちの一つである。その後ここを割り当てられた近藤勇や芹沢鴨ら13名が、主張の違いからこの浪士隊に反逆し、京に残留して会津藩お預かり“新選組”を結成、この場所をそのまま屯所として使用したという話は有名である。またここでは初代局長の一人である芹沢鴨の暗殺が行われ、現在よく知られている近藤勇一人を局長とする形の新選組が生まれた場所でもある。それに加え作家子母澤寛は、自身の数多い新選組取材の中で特にここ八木邸で長時間を割き、幕末当時の当主だった八木源之丞の次男為三郎の話を聞くことで、現在では第一級資料ともなった『新選組遺聞』(1929年)を書き上げたのである。つまり八木邸は、新選組誕生の地として二重三重に意味を持つ。

長屋門の前に立ってみると、立派な与力窓や出格子窓などが開放されており、当時の面影をそのまま感じ取ることができる。なるほどこの醸し出す風格は、ここ八木家の中祖がかの有名な越前朝倉家である由縁か——ふと右に目を向けてみると、近藤ら在京メンバーが八木邸右門柱に「松平肥後守御預新選組宿」の表札を掲げたというエピソード通りに、現在でも“新選組”的看板が掲げられており、ほのかに心が躍る。

早速入館料を払い、公開されている母屋の奥座敷へ。ここの奥座敷は主に水戸派である芹沢鴨・平山五郎・新見錦・平間重助・野口健二などが使用したといわれている（ちなみに近藤・土方らは現在新設の茶屋があるあたりに建てられていた別宅を使用していたらしい）。入って一番に感じたのは、急激な床冷えの寒さである。話によると、八木邸の長屋門及び母屋は京都市指定有形文化財に指定されているため、その保存ゆえから断熱材や暖房を入れる事ができないらしい。ということはこの寒さは幕末から続いているものなのか、新選組の隊士達もこの環境の中で生活していたのか、そう考えるとまたこれも貴重な

体験といえる。造りとしては、西端に土間を奥まで通じて、土間に沿って居間を3室ずつ2列に配した構造となっている。3部屋はそれぞれ襖で区切られるようになっており、襖を取り払うと部屋を繋げることができる。これはおそらく夏場家全体の風通しをよくするために用いられた、日本独自の家屋の特徴だろう。「昔はこの辺は農村地帯であったうえに京都は北の方が高くなっているから、ここから二条城や五山の送り火を見ることができたんですよ」。説明を受け私も中庭の方へ眼を向けてみたが、悲しいかな、現在では乱立するコンクリートの建物ゆえにその情景を楽しむことはできなかった。またこの辺りは、昔は南部家などといった郷士豪農宅がたくさん集まっていたのだが、現在ではその形を保っているのはこの八木邸だけらしく、なんともいえない寂しいものを感じた。

話は芹沢鴨ら水戸一派の暗殺へと移っていく。この部分は私も事前に何度か本で読んではいたが、やはりその現地で話を聞くのとでは臨場感もはなはだ異なる。「この天井をご覧下さい。その時の血痕が未だに残っています」。それが惨殺された芹沢のものかはたまた首をはねられた平山のものかはわからなかつたが、見上げた天井には確かにそれが存在し、恐ろしいまでのリアリティを放っていた。

帰りに母屋の隣にある茶屋でおいしいお茶とお茶菓子を頂き、お礼を言うついでにもう一つの新選組屯所であった隣の“前川家”について尋ねてみた。「前川さんの方は個人宅ですからうちみたいに公開はしていないんですが……あそこの奥、土蔵が見えるでしょう？あそこがかの有名な古高俊太郎への拷問が行われた場所です」。古高俊太郎の拷問とは、尊攘派との噂が囁かれた杵屋の喜右衛門（=古高俊太郎）を新選組が捕縛、副長土方が五寸釘責めの拷問にかけたところ、「御所に火を放って天皇を長州に送り、守護職をはじめ反長州要人を殺害する」という計画を明かしたというものである。そしてこの事件は、翌日に起きた新選組の名を大きく広めることになった事件、“池田屋事件”へと繋がっていくのである。現在京の街に沈む静かな土蔵からは、そのような殺伐とした歴史があったことなど感じさせない。ただしやはりこの地には、司馬遼太郎が自身のエッセイの中で言うように「現地に行かなければわからない実感」が存在することを教えられた。



八木邸の中庭　近藤と芹沢は派閥が大きくなる前はここで刀を合わせるなど親交を深めたらしい



現在も同邸の鴨居に残る芹沢・平間暗殺時の刀傷

古都を巡って —道元と西田幾多郎を中心に—

1部 日本文化学科
2年J1組 2710125 加藤 太一

今回行われた六日間の研修旅行では京都・奈良という土地柄、これまで深く感じる事のできなかった日本古来の文化、特に寺社仏閣などの古くから残る建築物の美しさなどを肌で感じる事ができた。あっという間に過ぎていった六日間ではあったが、その中でも一番充実していたのは二日間の自主研修であった。

この二日間の自主研修日に於いて一日目は京都市内を、二日目は京都を離れ、単身四国まで赴いた。しかしここでは紙幅の関係上、四国については割愛する。

京都ではホテルから借り受けた自転車を使用して市内を巡った。地図を頼りに見知らぬ土地を迷いつつではあったが、自転車によって交通機関を利用すると通り過ぎてしまうような場所や足を運ぶには遠過ぎる場所まで隅々回ることが可能となり、北海道ではあまり味わうことのできない古都の街並みの美しさ、立ち並ぶ家の一つ一つが持つ趣やそこかしこにある史跡を存分に堪能することが出来た。

自主研修では、京都に点在する、曹洞宗の開祖である道元と所縁のある史跡を巡り回ることと、西田幾多郎が思索に耽りつつ歩いたことでその名が付いた「哲学の道」を歩き、その思想を作ったものの一端にでも触れることを課題の中心として据えた。



京都には、道元がこの地で生まれ育ち、亡くなったため、道元と所縁のある史跡が多数ある。生誕の地とも伝えられる松殿山荘や禅の修行をした建仁寺、道元が創始し布教活動を行ったと伝えられる欣浄寺、その生涯を終えた示寂の地の石碑など主に巡った場所だけでもこれだけある。の中でも特に印象深かったのは左の写真に示した示寂の地の石碑である。写真では伝わりにくいが、この石碑

は住宅街の真ん中の猫の額ほどの土地にぽつりと何の目印もなく建っていた。あまりにも目立たないので探している最中に二・三度通り過ぎていたほどである。しかしその簡素な石碑は禅によって我を離れ仏と一体になる座禅の行の心を伝えている、そのような趣があった。

一方西田幾多郎所縁の「哲学の道」は日本の道100選にも選ばれているだけあって美しい道であった。自分も西田に倣い、西田の著書である『善の研究』や、フランスの哲学者

であるベルクソンの著作などを歩きながら、また座って風景を眺めつつ読み耽った。しかし時期的に仕方が無いのだが、右に写真で示したように、桜の木々は枯れ、天気も淀んでいたのは少々残念であった。無論それでも美しい道に変わりは無いのだが……。もう少し時期を早めて行ければ雪化粧をした道を歩くことができたという話を聞いたが、再び京都へ行く機会があれば春や夏などもっと良い季節に行きたい。



古い街並みが今もなお伝統的な日本の美しさを語り、また新しい街並みが今の日本を語る京都。新しいものと古いものが融合され、今にあるこの都市は特異な空間として日本人である自分にさえ映った。ロラン・バルトは日本を「表徴の帝国」と呼んだが、意味で語らず表徴で語るその姿、中心の無さを感じる事が出来た。今回の研修旅行はとても有意義なものであった。そこで感じたこと、思ったこと、経験したことをこれから勉強に活かし、繋げていけるようにしたい。

清水界隈を歩く

1部 日本文化学科
2年J1組 2710126 加藤 茂実

私は今回の日本文化演習での自主研修で、清水寺と六波羅蜜寺、三十三間堂を見学した。清水寺は高校時代の修学旅行で一度見学していたが、当時とは訪れた時の印象が大分変わっていたように感じられた。清水寺の本殿には当時は無かった張り紙が貼られており、昨年の3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震のために祈るよう、参拝客に促す内容であった。東北地方のために日本人だけではなく海外からの観光客までもがお賽錢を入れ祈祷してくれていた事実に思わず胸が熱くなった。



清水の舞台から音羽の滝方面を望む

本殿の正面にはかの有名な清水の舞台が広がっており、衝動的に下を覗き込んでみたが、高校時代に眺めた時に感じた恐怖感や驚くほど高いという印象は薄れていた。恐らく研修旅行の直前にインターネットで清水の舞台について調べた際に、清水の舞台から飛び降りても生存率は80%を超えるという情報を見たためかと思った。確かに木々が茂っていればクッションになって助かりそうな気配を感じた。今回訪れたのは

真冬だったので木々は枝ばかりで少し寂しい佇まいだったが、もし秋に訪れたならば紅葉の鮮やかな黄や赤でより景色も素晴らしく趣深かったのではないかと少し残念に思った。次訪れる事があれば是非秋頃に来てみたいと思う。

そして清水の舞台からの景色を堪能した後、坂を下って清水寺と言えば一番に挙げられると言っても過言ではない音羽の滝へたどり着いた。音羽の滝の水を飲むのは今回が初めてだったが、かの有名な音羽の滝にしては実物は意外にも小さく、三つにわかれた滝の水の流れも滝と呼ぶには少し頼りないものだった。また、「学業成就」「恋愛成就」「延命長寿」と効能が三つにわかっているにも関わらず、滝の水の御利益はどれを飲んでも一緒であると立て札には書いてあったため少し残念であった。しかも、実際に滝の水を飲むときには、柄杓が重たかったり、自身の後ろに続く行列を気にしてしまい、祈願することすら忘れてしまった。

昼食を摂り、充実した土産物屋を通過し、清水寺をあとにすると、徒歩で行ける距離に六波羅蜜寺があるというのでそこに向かった。六波羅蜜寺を訪れるのは今回が初めてであったが、寺自体は意外にも小さめだった。中に入ると教科書や資料集でよく見るかの有



音羽の滝 流れ出る水はどれも同じ

名な空也上人像がガラスケースに納められていた。こちらの像も実際に見るとやはり小さく、私自身の身の丈(約162cm)よりも相当小さかった。しかしその小柄な身の丈にも関わらず、空也上人像の存在感は圧倒的で、穏やかな表情を眺めていると不思議と心が穏やかになっていくのが感じられた。さすがに様々な教科書や資料に取り上げられるだけあって素晴らしい像である。また、係の方に教えていただいたのは、空也上人像の正面よりやや左寄りに立ち、しゃがみこんで像の瞳を覗き込むとキラリと瞳が光るようになっている。空也上人像の瞳には水晶が使われており、なぜかその前述した角度からしか確認できないらしい。入場料の500円は最初は割高だと感じたが、見学を終えた後は寧ろ割安に思えたほどに空也上人像は素晴らしいかった。是非もう一度見てみたいと思う。

その後、閉門時間30分前に三十三間堂に到着し、滑り込みで堂内を見学した。外から本堂を眺めると普通の寺とは違いやたらと横に長く不思議にも思ったが、1,000体もの仏像を収容しているのだから当然かと納得できた。中に入ると長い御堂に綺麗に仏像が並べられていた。何メートルも続くその光景は圧巻で、一体一体眺めていても全く飽きがこないほどの迫力だった。1,000体の中には自分の会いたい人や知人に似ている仏像が必ずあると伝えられているが、私自身の会いたい人や知人に似ている像は発見できなかつたのが残念ではあった。閉門時間が迫っていなければ最初の地点に戻ってもう一巡したいと思うほどに三十三間堂の1,000体の仏像は迫力があり感動的だった。

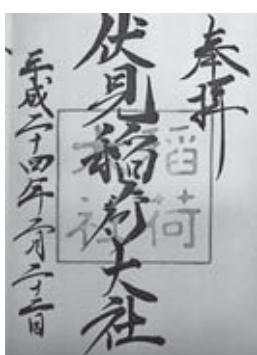
自主研修の京都探索では、嵐山方面などに行くことも計画していたが、清水寺から六波羅蜜寺、三十三間堂を見学して、清水周辺探索の計画を練って本当に良かったと思っている。数多い京都の寺の中で今回の寺選びは間違つていなかった。行って良かったと思える寺を選んでとても楽しい寺巡りの一日だった。

神道を見る

1部 日本文化学科
2年J1組 2710134 倉田 一輝

私は、「神社巡り」をテーマにして、今回の研修旅行に参加した。神社や寺院では、参拝の証、あるいは記念として押される朱印というものがある。私は初日に訪れた大神神社で朱印帳を購入し、京都各地の神社を参拝しつつ、これを集めることにした。

団体研修と自主研修で合わせて十四の神社を回った。境内に小川が流れる上賀茂神社や、非常に静謐な松尾大社など、とても美しい神社ばかりであったが、とくに私の心に残ったのは伏見稻荷大社である。伏見稻荷大社は全国数万の稻荷神社の総本山である。信者から奉納された鳥居の数は約一万基にも上り、狭い間隔で大量に建てられた千本鳥居と呼ばれるものは観光スポットとしても有名である。これらの鳥居が全て信者からの奉納であるという点は注目すべきことだと思う。信仰というものが目に見える形で現れているのである。人と神道とのつながりをこれほど視覚的に感じができる神社は、伏見稻荷大社の千本鳥居をおいて他に無いのではないかと感じさせられた。



朱印帳は屏風状になっているので、広げると十四社の朱印が並んだ状態を見る事ができるが、これが壯觀である。また、京都五社巡りという催しも行われており、これをきっかけに東西南北の神社を巡ることもできた。朱印は三百円の初穂料を納めることで押印して貰える。多くの神社を回るとなると決して少ない出費とは言えないかも知れないが、その分多くの朱印が押された朱印帳は思い出深く、価値のある物になると思う。今後機会があれば京都府以外の有名な社殿、例えば広島の嚴島神社や出雲大社、伊勢神宮などを詣でて、朱印を頂きたい。

自主研修全体を通して気づいたのは、札幌市に比べ京都市は街中に寺社が多いということである。古くからある寺社がそのままの場所にそのままの形で残っているのは、それが住民の生活や心に根付いたものだからだろうか。

我々は神道や仏教を日常生活とは別の、葬儀や元旦の時にのみ自分たちにかかる、何か特別な物として切り離してしまいかがちであるが、京都では仏教や神道はなんら特別な物ではなく、人々の日常に根付いたものである、という印象をその町並みから感じた。ファ-

ストーブ店などの看板の色が華美にならないよう抑えられていることはよく知られていると思うが、京都ではそのような文化財を尊重した街づくりがなされていたのである。

北海道は近代以降本格的な開拓に着手されたため、寺社などはもともと少ないが、文化財とはなにもそれに限ったものではない。北海道特有の文化と共存することの大切さ、文化を尊重し、それを守り伝えていくことの重要さを学んだ旅であった。



京都・奈良を歩いて日本文化を考える

1部 日本文化学科
2年J1組 2710145 佐久間 拓

私はこの度の研修旅行で生まれて初めて関西を訪れた。今まで本やテレビなどからの情報としてのみ自分の中に奈良・京都という都市が存在していたが、実際に自身の足で歩き、目で見た奈良・京都にはイメージしていた都市と同じ部分があり、また違う部分もあった。そのことから私は、改めて「百聞は一見に如かず」という言葉のとおり、何事も実際に自分の目で見て確かめるということの大切さを学んだ。



嵐山・竹林の小径

関西国際空港を出てまず驚いたのは、空港のまわりに植えてある竹だった。竹という植物は札幌ではまず目にすることがないものなので、とても新鮮で珍しく感じた。竹といえば京都は嵐山の竹林の小径であるが、私は自主研修の二日目に嵐山を散策した。天龍寺の園を参拝し北門を抜けると、左

右に竹林の小径が伸びている。そこを山側へ登って行くと傾いだ竹によって左右と頭上が竹に覆われ、日光が薄く漏れる程度に遮られる。今回は2月だったので寒さが増したが、夏ならば良い日除けになって涼しい風が吹く中で散策できただろう、また夏ならば竹の量も多く更に暗かったのだろうと思われる。静かな雰囲気の中にもときおり風が吹くと竹林全体が揺れ、竹同士がこすれ合い「ざあざあ」という迫力のある音が聞こえた。私は今まで竹林といえば静かなものを想像していたが、ただただ静かなだけではなく風を音でも感じじができる清涼さと静と動の雰囲気の混ざり合った不思議な趣のある空間だった。

次に感じたことは、町の歴史、建造物の歴史の深さであった。バスの中から町並みを見ると北海道はない瓦屋根の家ばかりである。またそれらの家々のいくつかには土蔵と思われる建物が隣接していた。家に倉があるということに、私は大変感動した。土蔵のある家など札幌では見たことがなく、またその古さ、代々受け継がれてきた家屋を使い続いているということに都市としての歴史の深さ、重々しさを感じた。そのような建造物の歴史の深さについてはもちろん数々の寺社仏閣にも見られた。初日に参拝した大神神社などは日本最古の神社と言われているが、建物は建てなおされているはずである。しかしそれでも、その場所に確かに流れた大神神社としての長い時間を参道の脇の苔むした石や太く大きな杉の木から感じとることができた。二日目に訪れた平城宮跡の朱雀門や大極殿といっ

た建造物は発掘された基礎部分以外は想像によって補われ建てられたものだが、基礎部分は元のままであるのだから、建物の規模は現在の再現されたものとそう変わらないはずである。そう考えると奈良時代に縦約20m、横約45m、高さ約30mの建造物を建てていたことだけでも驚きに値する。

私は自主研修一日目に清水寺や高台寺、銀閣寺など京都の名刹を回ったが、これらはまさに私がイメージしていた通りの京都、日本の古都の風景であった。これらを見て歩く内に私は北海道と奈良・京都のあまりの違いに、日本という国の多様性について考えた。古くからの町並や歴史の深い寺社仏閣の数々が現存する奈良・京都は日本の伝統の文化を守り続いている



銀閣寺

る。それは建造物だけでなく自然と共存した景観であったり、対外的な国としてのイメージ、国としての世界観ともいえるだろう。対して我々の住んでいる札幌は蝦夷地であった時代もあり、そこから開拓されてきた比較的新しい都市であるといえる。冬には気温が-10度にもなり、雪がうず高く積もる。よって、家の戸や窓は二重になっているし、屋根に瓦など敷かない。

北海道にこのように北海道固有の文化があるように、南には沖縄があり、琉球王国の流れをくむ文化を日本文化に融合させ、新たな文化として築きあげてきた。それだけでなく日本各地、様々な地方に様々な日本文化があるだろう。しかし、外国人だけでなく日本人もどこか京都や奈良といった古都に日本という国、文化のステレオタイプを見ているのではないだろうか。

札幌も奈良・京都も同じ日本である。これほど多様な文化を持つ国をステレオタイプに当てはめて考えるのは馬鹿げていることなのではないだろうか。小さな島国にも関わらず、地方によって多様な文化を持つ日本という「国」はとても興味深いと気づいた。私にとってこの度の研修旅行は日本人として国、国文化について改めて考えることができたとしても有意義な旅であった。

『壬生義士伝』の「義」を探る —新選組ゆかりの地を訪ねて—

1部 日本文化学科
2年J1組 2710150 佐々木 緑

「いいかね、諸君。京の町はこんなふうに碁盤の目になっている——」。京の町衆は子供達が迷わないよう、戯れ歌を教える。『壬生義士伝』の主人公吉村貫一郎は、新選組の新兵達にまず戯れ歌を暗唱させた。

関西の伝統的な町並みに触れることができた日本文化演習は、私にとって、「日本の再発見」に繋がった。自主研修では、京都における新選組ゆかりの地を訪ね、文学的観点から彼らの「義」について考えた。『壬生義士伝』（2000年）で浅田次郎が描いた「義」は、我々に馴染みのある「士道に準ずる価値観」とは異なる。しかし本来、新選組の本質は、そのような「義」にあったのではないだろうか。

私がまず訪れたのは、西本願寺移転前に新選組の屯所となった八木邸である。小説中の吉村は、休みになると朝からここに通っていたとある。奥座敷に残された芹沢鴨暗殺時の刀傷は強烈だった。ここから新選組は始まったのだ。私は、母屋の座敷で当時の状況についての貴重なお話を聞き、隣の京菓子屋でお茶をいただいた。京菓子屋の地には、かつて八木邸の離れがあったそうだ。新選組が頻繁に訪れたという八木源之丞さんのお屋敷を堪能した上、心温まる風流なサービスであった。

続いて訪れたのは西本願寺。北集会所は姫路市の(龜山)本徳寺に一部移設されてしまったとのことで、太鼓桟を確認した。小説では、西本願寺の庭で、北辰一刀流の吉村が、永倉新八を剣で圧倒する場面が描かれている。また、「壬生の狼」と書かれた屏の落書きを見た吉村が、京の町衆にとっての自分達の存在を「義」を貫く赤穂浪士ではなく、「血に飢えた、狂い狼の群」に過ぎないと悟る場面がある。その屏というのが西本願寺にあった。これが近江屋事件の謀への確信に繋がるのだ。

私は更に二条城へ向かった。小説では、居場所を失った新選組が大阪城へ向かう早朝、戦に備えて二の丸御殿の前に整列したとある。自主研修で最も印象深かったのは、二の丸御殿を見て回ったことであった。車寄の美しい欄間彫刻に誘われ、御殿に足を踏み入れると、うぐいす張りの廊下が鳴く。御殿に流れるどこか張りつめた空気は、狩野探幽・尚信らによる絢爛豪華な襖絵の迫力も相俟って、建物自体の莊厳さを増していた。また、大政奉還の間の再現は圧巻で、まるで自分が歴史の節目に立ち会ったかのような感動を覚えた。天守閣跡から眺めた景色も忘れられない。風情に満ちた良い経験となった。

2日目は、靈山歴史館を訪ねた。当時実際に用いられていた鉄砲や砲弾に触れたり、近





江屋事件や池田屋事件の解説映像を3Dで見ることができたりと、子供や若者にも楽しめる工夫がなされていた。歴史館では、龍馬の暗殺者を見廻り組の桂早之助とする有力な説をとっていた。『壬生義士伝』では、原田左之助に罪が着せられ、薩摩を背後に、黒幕を伊藤として、龍馬を斬った刺客は斎藤一であるという説が展開されている。これはフィクションなのだが、自由かつ独特な浅田の発想がうまく物語に調和していたように思う。

歴史館には龍馬を斬った刀が展示されており、ひと際目をひいた。勿論、新選組関連の展示コーナーも充実していた。だんだら模様と「誠」の字が刻まれた袖章は有名だが、実物を見たのは初めてである。新選組隊士名簿（英名録）には、150名の隊士と芹沢鴨一派の記載がある。展示では確認できなかったが、これは吉村貫一郎の名が明記された数少ない史料のひとつであろう。また、「東照大權現」と書かれた迫力ある大幟は、新選組が戊辰戦争で北関東を転戦する際、「誠」の大旗の代わりに使用されていたようだ。島田魁が胴に巻いて戦ったとのことで、血や焦げ跡が残っていた。霊山歴史館では、新選組の生きた史料に出会い、その痕跡を感じることができた。

吉村が国を捨て、人を斬ったのは、尊王攘夷の志を果たすためではなく、ただ生きるためにだった。新選組は、どうにもし難い時代の不条理を背負わされ、そこから脱却することはできなかった。彼らがどれほど「誠」一途に駆け抜けようとも、「壬生狼」であることに変わりはなかったのだ。だからこそ、彼らは、自らの本心を見栄や面目で覆い「士道」を叫んだ。その中で、吉村だけが、ただ一人声を大にして「義」を問うのである。彼の言う「義」とは「人として踏むべき正しい道」であり、それを貫くならば、武士道を違えても人の道を踏み誤ってはならない。彼が立ち向かった「義のための戦」とは、義を不実となす、大いなる不実に対する戦だった。この「義」を以てこそ、変わり者の吉村が新選組の「良心」たり得たのである。

小説に、壬生の人々が、大雨の中、大阪城へ向かう新選組の隊士達を見送る場面がある。「この人たちのために戦うんだ」と池田七三郎は思った。「待っていうのは、女子供や貧しい人たちを守るために命を捨てるんだ」。私もこの旅で、京の人々のあたたかさに触れた。ひとたび道を尋ねれば、彼らは自分の知る「京都」を快く語ってくれたのだ。

変えられぬとわかっている歴史の中で、精一杯その存在を主張した新選組。近代日本の礎は、激動の時代を生き抜いた若者達が築いたのだ。吉村は、自分達の掲げた「忠の一字にかわる誠一字の旗」こそが新しい世を作るのだと信じた。時代は違えど、彼らもまた我々と同じ人間であり、若者である。恥を知る人間が生き難さを感じ、生命の軽視化が進む現代であれば、尚も問われるべき「義」があるはずだ。それは、人間本来の自然な在り方であったり、国民的アイデンティティ回復の必要性であったりするだろう。浅田は、故郷を誇り「義」を貫く主人公に自らの思いを託したのである。

三十三間堂を通して見る日本の仏教文化

1部 日本文化学科
2年J1組 2710159 菅原 千晴

今回の日本文化演習を通して、古墳時代から江戸時代までにわたる広い時代の文化や生活様式を学ぶことが出来た。伊根の舟屋群や天橋立、国立民族学博物館などは京都や大阪の中心から離れたところに位置しており交通手段が限られるので、個人で訪問するにはなかなか難しいものがある。そのため、団体研修で訪れることが出来たのはたいへん貴重な体験だったように思う。団体研修で遠方にまで足を運べたことも印象深かったが、自由に京都市内を見て回ることの出来る自主研修も非常に充実した時間だった。



自主研修でもっとも興味が惹かれた三十三間堂では、そのスケールの大きさに圧倒されるばかりであった。正面の柱間が33あることから「三十三間堂」と称されているこのお堂は、本年の大河ドラマの主人公になっている平清盛が後白河上皇代

の院政庁の一画に造進したものである。お堂の中を見学すると天井を支える柱の一部がライトで照らされていた。そこには花模様が描かれていた跡がかすかに残っており、現在では飾り気がないようにみえるお堂も創建当時はきらびやかにいろどられていたことが分かった。

仏像はお堂内の中央に据えられている千手観音坐像を中心に左右それぞれ500体、計1001体の千手観音立像が安置してある。観音坐像は大仏師湛慶が晩年に作成したもので国宝に指定されている。これらの仏像はすべて寄木造という技法で作成されており、800体あまりが鎌倉時代の再建の際に約16年かけて作られていることから、莫大な時間と労力がかかっていることが窺える。

かつて高校時代に、「観音さまの顔がひとつひとつ違っていて、その中には会いたい人の顔にそっくりな仏像がある」という話を日本史の授業で聞き、半信半疑であったが、実際に間近で見てみると本当にそれぞれの顔が少しずつ違っていたことが、今回の自主研修における一番の驚きだった。目が切れ長なものであったり片目のみ目を閉じている、いわ

ゆるウインクしているような仏像があつたりとそれぞれに仏像を作成した人々の個性が垣間見えるようであった。

また、観音像の前に置かれている二十八部衆は、その多くがインドを起源とした神々で、力強い顔立ちがとりわけ印象的であった。目には水晶が埋め込まれており、リアリティの高さを窺うことがた。それぞれの像に、どの神話に登場する神をイメージして作られているのかといった詳しい解説がなされていたため、28体全てを見終えた頃にはインド神話の概要を知りえたような気さえした。さらに江戸時代初期の画家である俵屋宗達の『風神雷神図屏風』のモデルになったといわれる風神雷神像は、お堂内の両端に安置されながらも、二十八部衆とは一味

違った躍動感にあふれ、見学に訪れた人々を立ち止まらせるほどの存在感を放っていた。

高校の修学旅行では新撰組にゆかりのある地を訪れたのだが、当時は幕末の知識が浅い状況で訪れたがために、ただの観光となってしまった。しかし今回は、大学で日本史を学んだ後の研修であったため、それぞれの歴史的建造物が建てられることになった時代背景や文化を頭で整理しながら見学することが可能となった。また、高校の自主研修で見つけられなかった坂本龍馬と中岡慎太郎が暗殺された近江屋の跡地を思いがけず発見し、幕末の争乱期を駆け抜けた二人の姿が石碑という形で遺されているのを目の当たりにしたことでの、古き良き日本の心を再確認させられたように思う。このように関心のある場所を満足ゆくまでこの目で確かめ探究することができ、自分自身にとって非常に有意義な自主研修となった。

今回の日本文化演習で手にした知見を次年度から始まるゼミでも活かしていきたい。



京都らしい光景

1部 日本文化学科
2年J1組 2710168 館石 翔

「京都らしい」光景というと寺社や仏像を見たときにそう感じる人が多いだろうし、私も今回の研修旅行に行くまではそのように考えていた。しかし旅行を通じて私にとっての京都らしさとはただ日本的なものを見聞きしたときに感じるものだけではなくなったようだ。

六日間の旅行日程のうち四日間は、団体での研修であり、初日には大神神社（桜井市）や崇神天皇陵（天理市）を見学することができた。その翌日には奈良時代に元明天皇の手で藤原京から遷都され、奈良盆地に造られた平城宮の跡地を訪れ、朱雀門・大極殿などの建造物を見学し、平城宮跡内に建てられた平城宮跡資料館では、平城宮の出土物や、発掘調査の過程などを知ることができた。



平城宮朱雀門

また残りの二日間は、自主研修となっており、各自旅行前に計画した旅行計画を基に京都市内を中心に、概ね関西一帯を自由に散策する。

私は初日の午前中を中川かず子先生に同行させていただき、北野天満宮・金閣寺・広隆寺など太秦とその周辺の地域の見学を行った。中でも興味を持ったのは広隆寺の弥勒菩薩像をはじめとする多くの仏像であり、これらは手で触れられるほどの間近で見学することができ、教科書などの写真ではわからないような一木造の木の質感が見てとれた。広隆寺はもともと渡来人である秦河勝が聖徳太子より賜った仏像を御本尊として建立したとされ、そもそも広隆寺のある太秦という地名自体に機織の技術を伝えた秦氏の形跡が見て取れるほど、中国から来た渡来人との関係は深いものである。団体研修の二日に参拝した黄檗宗の本山である黄檗山萬福寺も中国の影響を受けている。萬福寺は江戸時代に中国から渡来した隱元禪師により開かれ、四隅の反り上がった屋根や木魚の元となった開版（魚梆）と呼ばれる禪僧の修行の時間を知らせるために打ち鳴らす仏具などのほか、読経も中國的な韻律で行われるなど中国と日本の文化が組み合わさった独特な文化が見てとれた。

私はこのような体験から、日本文化を考えるにあたってはただ日本についてのみ考えていれば良いわけではなく、他の文化との比較によって日本の文化を検証するということの重要性を再認識させられた。また京都の町は自然と町並みとがうまく融合して共存しているように感じられた。

京都の町を歩いてみると、京都駅の周辺は都市化が十分に進



鴨川 高野川（右）と賀茂川（左）の合流地点

み、新幹線まで走っている一方で、団体研修で訪れた丹後半島・伊根地方では、自然が造り出した天橋立が現在でも変わらず存在し、漁師が舟屋から船を走らせ漁に出ている。こうした自然の光景は丹後半島だけでなく、京都の街中でも下鴨神社の周辺に広がる糺の森では舗装もされていない道を抜け、そのまま神社を南に下ると、東から流れる高野川と西から流れる賀茂川が合流して鴨川が見えてくるように、しばしば目にする。鴨川の河川敷を歩いているとジョギングをしている人や、座って足を休めている人が目に入り、展望広場を含めて十階まである近代的な京都駅構内の光景とは大きく違って見えた。

札幌に住んでいても札幌駅と豊平川があり、京都駅と鴨川に近い構図ではあるものの、京都の方がよりスケールが大きく、また昔ながらの街並みを残している分、より複雑に文化が混ざり合った町であるように感じられた。すなわち、私にとって京都らしい光景とは、寺社や仏像よりも、歴史を感じる下鴨神社を背に自然の残る鴨川河川敷を歩きながら、近代的な地下鉄の駅と昔ながらの瓦屋根の木造住居を同時に見たときに強く感じるよう、多様な文化が融合し、調和している姿である。

異端絵画 —江戸画壇に対する抵抗—

1部 日本文化学科
2年J1組 2710172 塚田 秀基

今回のレポートにおける「異端」とは絵画の流派や手法にこだわらず独自の画風を確立することを指す。私は研修中に相国寺境内にある承天閣美術館で催されていた「館蔵の屏風絵展」を見学したが、思いがけず三人の異端絵師の作品を鑑賞することができた。

まず目に入ったのは長沢蘆雪¹⁾の「白象唐子図屏風」と「獅子図屏風」である。「白象唐子図屏風」は六曲一隻で左隻には水辺で遊ぶ唐子²⁾、右隻には横たわる巨大な白象と唐子が戯れている様子が描かれている。老人のように皺だらけの皮膚と垂れさがった目をした象と皆大人びた表情をした唐子の描写は非常にグロテスクだ。一方で「獅子図屏風」の獅子は「猛獸らしい凄みをさっぱり欠いていて、むしろ猫を思わせる無邪気さ」(辻 2011, p. 196) が感じられる。「白象唐子図屏風」のグロは当時人気だった曾我蕭白³⁾の怪奇画の影響が受けられ、「獅子図屏風」のコミカルさは師である円山応挙⁴⁾の画風を超えるよう苦心して得た画風である(辻 2011, p. 207)。ふたつの影響が蘆雪の独自の画風の創出に至り、彼は異端絵師となり得たのである。

ところで私は今回の展覧会で初めて伊藤若冲⁵⁾の作品を鑑賞した。若冲といえば極彩色を用いたアリズムな花鳥画や鶴画で有名であるが、展示されていたのは全て墨絵であった。だが、葡萄の蔓や実や葉が茂る「葡萄小禽図」や巨大な芭蕉の木の横に月が浮かぶ「芭蕉図」は墨の濃淡が効果して現代的な装飾の趣がある。また「群鶴蔬菜図押絵貼屏風」の鶴や、「松鶴図」の鶴の鳥肌の質感の描写は緻密すぎて驚嘆を通り越して不気味であった。若冲は狩野派と中国の絵を学んだが、先人の作品の模倣に嫌気がさして独自の画風の確立を目指した人物である(辻 2011, pp. 99–100)。彼が自分の画風として装飾的な絵画と写実的な絵画の描き分け(あるいは融合)を確立したことは異端の極致であるといえる。

展示室の奥には屏風以外の美術品が展示されていた。壺や蒔絵の箱や仏像に混ざって展示されていたのは岩佐又兵衛⁶⁾の「三十六歌仙画帖」である。又兵衛は生前に数多くの歌仙図を描いている。例えば、福岡市美術館にはボディーラインがまるで波のようにうねって描かれた「三十六歌仙画冊」がある。また仙波東照宮には「徳川家からの注文のせいか、伝統的な様式を墨守している」(安村 2003, p. 14)「三十六歌仙額」がある。「三十六歌仙画帖」の歌仙は「三十六歌仙額」に近く又兵衛の独自性は薄かったが、彼の人物画の特徴である豊頬長頤⁷⁾は健在であった。又兵衛の作品をみると数多くの古典を材にしていったことが分かる。「三十六歌仙画帖」も又兵衛の古典趣味が影響して描かれた作品である。しかしながら上代貴族の人物像に豊頬長頤を取り入れることで、大和絵的な優美さが崩れて卑俗さが露出てしまっている(辻 2011, p. 50)。独自の画風で貴族の雅な美しさを

消し去り、人間の本能的な実像を描いた又兵衛は異端の絵師であるといえる。

異端絵画が発生した原因として美術研究家の辻惟雄は「江戸社会の閉鎖性」(辻1973, p.40)を挙げている。江戸時代は民衆への精神活動の監視が厳しい上に支配階級の御用絵師である狩野派が形骸化した時期であり、若冲と蘆雪の時代は特に顕著にみられる(同上)。また又兵衛の時代は土佐派がまだ御用絵師にはなっておらず、美術界は安土桃山の障壁画を受け継ぐ狩野派の独壇場であったといえる。ふたつの時代に共通する江戸時代の閉鎖的な環境への抵抗が彼らの独創性を生み出し、異端絵画の創出に至ったのである。同時に異端絵画は江戸画壇への抵抗でもあった。また彼らの絵画は「新奇なもの、非日常的なものに寄せる市民の並々ならぬ好奇心」(同上)に共鳴し、当時センセーションとなつたことは特筆すべき点である。当時の市民的好奇心に寄り添つて登場した異端絵画は、近世日本文化の形成の実像を探る上で重要な資料であるといえる。

註

- 1) (1754~99) 江戸中期の画家で円山応挙に師事し異彩を放つ絵画を描いた。
- 2) 中国風の服や髪形をした子供のこと。
- 3) (1730~81) 江戸中期の画家で荒々しい筆で特異な人物画を描いた。
- 4) (1733~95) 江戸中期の画家で写実性と伝統的な装飾画様式を融合させた円山派を創出した。
- 5) (1716~1800) 江戸中期の画家で狩野派や中国の絵を学び、写実的で濃厚な色彩を用いた絵画を描いた。
- 6) (1578~1650) 江戸初期の画家で土佐派や雲谷派に学び、人物画や故事を描いた。
- 7) ふっくらとした頬と長いあごのこと。

参考文献：辻惟雄（2011）『奇想の系譜』、ちくま学芸文庫

辻惟雄（1973）「本朝逸品画風」、小林忠・辻惟雄・山川武『水墨美術体系／第十四卷 若冲・蕭白・蘆雪』、講談社

安村敏信監修（2003）『週刊日本の美をめぐる』第四十九号、小学館

庭園を歩く

1部 日本文化学科
2年J1組 2710176 中崎 翔太

今回の関西研修旅行では、日本の中でも多くの文化財を擁する京都・奈良・大阪の三つの都道府県を巡って、普段学んでいる「日本文化」について再認識する旅行になった。奈良・京都の街並みや文化財、重要伝統的建造物群保存地区に選定される伊根地方の舟屋など、北海道にはない様々な風景を見ることができた。

ガイドの方に説明していただいた各名所にまつわる伝承や由来には、日本の古い歴史や伝統文化、日本神話などが関係しており、何百年と重ねてきた歴史を感じた。万葉集の歌に詠まれた山々、貴族や歌人たちが親しんだ京都の自然を自分の目で見ることができたのは大変良い経験になったと思う。

そのほかに、自分で研修計画を立てることができる自主研修日が二日間設けられており、私はこの二日間を利用して京都の街や寺社を歩き回った。鹿苑寺・慈照寺の池泉回遊式庭園、代表的な枯山水庭園である龍安寺石庭、臨済宗の寺院である建仁寺など、室町文化期中に建立された寺社を中心に訪れた。



鹿苑寺・慈照寺はそれぞれ金閣寺・銀閣寺という通称で有名であるが、この二つの境内にある大きな池を中心とした庭園は池泉回遊式庭園と呼ばれるものである。回遊式庭園は日本庭園の集大成ともされ、園内を回遊して鑑賞する庭園である。池の周りには多様な植物や石組みを配しており、季節によって様々な風景を楽しむことができる。

一方、枯山水庭園は水を用いずに石と白砂を庭に敷き詰めて山水の風景を表現する庭園様式であり、龍安寺や大徳寺の石庭が有名である。共に室町時代に幕府の庇護を受け発展した禪宗の寺院などで多く造営された形式であるが、この二つの庭園は大きな違いがある。枯山水は回遊式庭園とは違い、屋内から静かに鑑賞するよう造られている。これは「遊興の世界は不要である」という禪宗の精神によって、遊楽・散策などの要素を取り除いたからである。



室町文化期に造営された日本庭園の発展も、一度でも現地を訪れればより一層深く理解することができる。教科書に載っている写真などでもこれらの文化財を目にするすることはできるが、実際にその場所を訪れ、自身の目で見て学び取る経験はとても大切であると実感した。

現在では世界有数の観光都市である京都の街。時代の移り変わりとともに、様々な文化を生み出し残してきた。訪れる度に新たな発見ができる、そんな場所であると思う。今回の研修旅行で得た見聞と経験をこれから学習にも生かしていきたい。

過去と現在の調和

1部 日本文化学科
2年J1組 2710184 橋田恵利香



今回の日本文化演習では、高校の修学旅行とは全く違った奈良・京都を楽しみ、北海道にいては感じることのできない日本の文化を直接五感で体験してきた。古墳や平城宮跡・平等院・萬福寺など時代や文化の異なる旧跡を見てまわることによって、現代とは異なる日本人の思考の一端に触れることができ、これから日本文化を学ぶ上での貴重な体験として心に刻まれている。

その中でも、ほとんど交通機関を使わずに京都の町をゆっくりと堪能した自主研修では、「日本文化とは何か」ということを考えさせられた。

研修旅行の自主研修1日目は、きぬかけの路をめぐる旅をした。きぬかけの路には金閣寺・龍安寺・仁和寺などの世界遺産があり、見所も満載の観光名所となっている。これらの寺院を巡る中で、最も印象に残ったのは金閣寺である。

金閣寺は正式名称を鹿苑寺といい、室町3代將軍足利義満の別荘を、後に寺院としたものである。金閣は仏舎利を祀った舎利殿のことを言う。私は修学旅行時に一度金閣寺を訪れているが、前回は紅葉の季節だったためか、そのときとはまた違う雰囲気をかもし出していた。

現在は方丈の特別拝観を行っており、今回は幸運なことにも前回は見られなかった方丈の中に入ることができた。方丈は創建以来初の解体修理が平成19年秋まで行われ、その際に古くなった杉戸絵を現代日本画家の2人に新調してもらったという。これを聞いて私はとても驚いた。古くなったものを復元して同じものを置くのではなく、まったく新しいものと交換するのは日本の文化を壊すことになるのではないかと思ったからだ。最初からあったものは最後まで残してこそ歴史を残すことになると思い込んでいた。しかし、この考え方のすべてが正解ではないということを今回の研修で知ることができた。古いものをそのままの形で残すことも大事なことではあるが、新しいものでこれを補っていくことも大切なことなのである。そうすることで古い建造物が残され、再建され、そして形をえて、また歴史となってきているのだ。

古代より都として栄えた奈良・京都では、歴史的建造物が生活空間の一部として今でも

当たり前のように残っている。地元の小学生の野外学習の場として、散歩道として、また境内が車道として使われている寺院もあった。そして、多くの寺社は観光客であふれており、外国人の姿も数多く見られた。京都や奈良では歴史を感じることができるが、それは昔からあったものと全く同じものではなく、現代に受け継がれて少しづつ形を変えたものである。

過去からあったものに新しいものが入ってくることで、現代の日本文化が形成されており、現代の日本には新しいものと古いものが入り乱れている。奈良・京都は一目見てわかる例である。

異なる文化を受け入れて自文化を捨てるのではなく、また異なる文化を全て排除するのでもなく、異なる文化と自文化を融合させることで現代の日本があるのだと思う。日本は古くから異なる文化を取り入れて自文化を上手く発展させていったということがとてもよくわかった。

偉人が残したもの

1部 日本文化学科
2年J1組 2710186 波連早恵子

2月20日から25日までの研修旅行は私にとって非常に貴重な体験とあった。5泊6日という長い研修の中で、いろいろな「日本らしさ」を感じることができたからである。4日間の団体研修では大神神社や崇神天皇陵、朱雀門をはじめとする平城宮跡、宇治の平等院鳳凰堂などさまざまな場所を見学したが、今回は特に印象に残っている自主研修で訪れた場所について書いていきたい。



自主研修ではいくつもの寺や神社を訪れた。世界遺産であり、「清水の舞台」や音羽の瀧でも有名な清水寺や、重要文化財である木造空也上人立像が保存されている六波羅蜜寺などを見学したが、特に印象に残っているのが金閣寺（鹿苑寺）である。金閣寺を訪れたのは2回目であるが、前回はじっくり見ることができなかつたため、今回の研修でゆっくりと長い時間

をかけて見学できたのは非常に良かった。やはりテレビや写真とは違い実物を見るとその迫力に圧倒される。金箔で仕上げられている舎利殿・金閣は遠くからでも存在感があり、しかし室町時代の代表的な庭園である池泉回遊式庭園とも調和していて非常に趣があると思われる。金閣の屋根には宇治平等院鳳凰堂とは一味違った鳳凰も見ることができ、平等院鳳凰堂と金閣寺の2種類の鳳凰を間近で見る体験ができて良かった。また、京都でも寒い日々が続いている雪が降ったといった報道にも接し、雪化粧した金閣寺が見られるかと期待していたが、幸か不幸か良い天気に恵まれた。

また、他に三十三間堂（蓮華王院本堂）にも訪れた。閉門する30分前に到着したこともありあまり長い時間見学することはできなかつたが、それでも本堂に保存されている観音像等の持っている雰囲気や迫力はすさまじいものであった。三十三間堂を初めて訪れるのにあたって、一番楽しみにしていたのはやはり1,001体（そのうち5体は全国の博物館に委託されていた）の木造千手観音立像であり、細身であつたり若干ふくよかであつたりと1体ごとに異なる体型や表情を見てることができて非常に良い経験になった。しかし、本堂の両端に展示してあった風神・雷神像には驚かされた。江戸時代初期の画家・俵屋宗達の

『風神雷神図屏風』のモデルになったともいわれるその像は、どちらも力強く今にも動き出しそうな躍動感があった。鎌倉時代に生きた人々が「五穀豊穣」をもたらす神々として信仰したのも納得がいく。今回の研修で国宝である風神・雷神像を見たときの感動は忘れないであろう。また、余裕を持って見ることはできなかったが、風神・雷神像の間には同じく国宝の二十八部衆像というものもあり、インド起源のものが多いその28体の神像は、神話的な形姿が非常に印象的であった。千手観音を守るという二十八部衆像は風神・雷神像に負けず劣らず迫力があり、神聖なものであったと思われる。

今回の研修旅行では改めて日本文化の良さを知った。過去の文化と共に存している京都という町は非常に素晴らしいものだと感じると同時に、これからもその文化をしっかりと守っていかなくてはならないと強く感じた。日本文化演習を通して感じたことや学んだことをこれから講義や専門演習で生かしたい。また、もし今後再び京都を訪れる機会があるのなら、今回訪れることができなかった神社や寺院などを、その建物や仏像が作られた歴史的背景も考えながら見学したい。



嵐山の天龍寺、竹林

1部 日本文化学科
2年J1組 2710188 平野 梓

烏丸丸太町のバス停から93号系統の市営バスに乗って、まっすぐ嵐山までいくことができる。二月の、正月と春のちょうど間の時期であったためか、平日の昼ということもありバスの中は空いていて、心地のよいバス旅であった。ここで注意すべきは、バス賃である。一律で220円かと思えば、途中嵯峨中学前から一律の範囲から外れ、嵐山天龍寺前へ着く頃には240円まで上る。220円だけ用意していると痛い目を見るので、注意しておきたい。

竹林は、到着するバス停から行くと天龍寺の裏にある。私は、天龍寺にて本堂を見て回り、庭園を抜けて竹林へと進んだ。天龍寺の周辺には多く土産物屋や食事処があるので、観光には適していると言える。少々値は張るが、旅行で金を惜しむのは無粋であろう。

天龍寺は大きな寺院であり、敷地内にはいくらか弘源寺や三秀院など建物が点在している。それらへ寄り道しながら、石畳と砂利の道を天龍寺本堂へ向けてのんびり歩くのもよい。途中で朱印所もあり、御朱印を捺してもらうこともできる。

本堂の大仏丈には、特別展示として香山又造の「雲龍図」がある。それも目的の一つであったのだが、残念なことにそれは土日だけで、平日は展示していないらしい。墨色の圧倒的な迫力をもつ龍を見ることはかなわなかった。しかし本堂を前にして駄々をこねているわけにもいかず、私は入場料を支払い、本堂へと向かった。本堂の入場は100円、庭園は500円である。計600円でぐるりと回れるのだから、安いものだ。

堂内では靴を脱ぎ、スリッパで移動することになる。中に御手洗いがあり、並んだ蛇口が小学校の水飲み場を思い出させる。御手洗い横を通り過ぎ、廊下を渡っていくと、内側から庭園を眺めることができる。庭園参拝とはまた違った角度からの風景は、確実に目に収めておきたい。途中、立ち入り禁止の部屋の壁に、龍の絵があった。しかし残念なことに、絵は光沢を帯びていて、日を反射してよく見ることができなかった。胴には庭園や観光客の姿が映ってしまい、台無しである。ここへは、日が反対側にある朝か、沈んでしまった夜に訪れるのがいいのだろう。

庭園を眺めながら廊下を渡っていくと、畠の敷かれた広い空間があった。日が差してい



てあたたかく、日向ぼっこに最適なところだったのだが、立てられた板には「寝転がる事を禁ず」の文字があり、残念ながら休憩はできなかった。達磨の描かれた掛け軸が、書院造の部屋の風情を際立たせ、ゆったりとした時を演出する。できるのならばここで腰を落ち着け、桜餅でも食べたかったのだが、そもそもいかず、しぶしぶ部屋を出ることになった。

さて、堂内をぐるりと回り、一旦外へ出ると、次に向かったのは庭園だった。堂内からも覗けた庭園を、今度は内側の視点から眺められる。苔の生えた庭が美しく、自然と調和する日本文化の片鱗を伺える。池があり、水との融合を風とともに感じができるのだが、いくつか分かれ道があり、私は竹林へ向かうため、木々に囲まれた道を進んだ。そちらにも途中には浅く小さな池があり、カエルの置物があった。カエルの背中には苔が生しており、過ぎていった年月を思わせる。池にいくらか小銭が落ちているのを見るに、投げ入れることで御利益があるのだろう。私も一円玉を投げ込み、カエルに合掌をした。

庭園を北門から抜けると、いよいよ竹林である。出てすぐに竹が密生していて、風が吹くと竹が高いところで美しい音色を奏でる。寺から隔絶された竹林はとても静かで、音や景色が見る者を癒す。人力車が少し邪魔であったが、雰囲気もよく、いいところである。

ただ、竹のいくつかに、「変体同盟」や「DOM」などと、落書きの施されたものが見られた。その中にはハングルやよくわからない文字もあり、外国人が竹林を訪れ、落書きを残していくのだと考えられる。非常に残念であった。

竹林を抜け、帰宅しようとバス停へ行くと、嵐山から烏丸丸太町へいくバスは、休日にしか出ないのだとあった。行きはよいよい、しかし楽に帰ることはかなわず、私は仕方なしに電車に乗り、地下鉄に乗り継いでお金をかけて帰った。

日本の文化は、外からの濁流によって汚されつつあるのだ。人と文化との間に隔たりが生まれ、やがて文化は新しいものへと移り変わらるのだろう。古いものは廃棄され、景色は変化していくのだ。今回見た竹林も、いずれは「雲龍図」のように目にすることもできなくなってしまうのだろう。浮世離れした嵐山周辺や、隠された「雲龍図」、そして汚された竹林から、物悲しさをしんみりと感じた。



文化遺産と生活の共存 —京の都を歩き、感じること—

1部 日本文化学科
2年J1組 2710189 福井 智史

バスの停留所や地下鉄の駅、各要所一つ一つの名前には国の重要文化財である寺や神社の名前が記されており、京都という街は日本の歴史と常に隣り合わせなのだということを改めて感じることのできる演習旅行であった。一回目の自主研修で訪れた太秦にある廣隆寺は京福電鉄の駅から目の前に位置しており、自動車が通る少し大きめの道路が隣接していた。重要文化財である仏像が多く存在している廣隆寺の境内付近であったとしても、そこに住む住民の利便性を考え作りこまれた生活道路の設置は必須なのだろう。その分近代的な文化を見た後にすぐ、廣隆寺で見ることのできた弥勒菩薩や千手觀音像などの仏像の衝撃は強かった。仏像が安置されている建物の中央に位置する微笑を浮かべている仏像が弥勒菩薩であり、それに向かい合っているとても大きな三つの像が千手觀音像である。三体の中でも特に真ん中の千手觀音坐像の迫力はすさまじく、冬の床の冷たさをしばらく忘れてしまうほどであった。間近で観察したため、普段は気付くことのできない仏像の木目までしっかりと目視することができた。また、様々な形で存在していたと考えられる何本もの腕のいくつかはもげており、仏像の年代や歴史を感じることができたと同時に、木で造られた仏像のたくましさを感じることのできるものであった。

その他妙心寺や龍安寺などにも足を運び、境内の中を歩きガイドの人から様々な知識を学ぶことができたが、私が特に驚いたのは次のようなことであった。大本山である妙心寺の境内には数多くの塔頭寺院が設置されているが、私が訪れた隣華院の出入り口である道は保育園の通学路であり、保育園に通うわが子を迎えてくる親御さんたちが車でやってきたりしているのだ。境内の中には保育園があり、普通に自動車が走り回っているということに少なからず衝撃を受けた。まさに昔の文化と現在が重なり合い、そこで暮らす市民が存在するということに感銘を受けた瞬間であった。隣華院のなかにあるふすまに描かれた美しい山水図にも感動したのはもちろんだが、昔の文化を肌で感じることができたすぐそのあとに近代的な乗り物である自動車が目の前を通り、小さな子供たちが境内を自由に歩き回っていることに驚いてしまった。

二日目の自主研修では千利休ゆかりの地を訪れようと、樂美術館や大徳寺などに足を運んだ。樂美術館には茶の道具の一つである茶碗が数多く保管されており、素朴な茶碗に千利休が求めた茶の心の一端をかいまみることができる。また、茶は様々な場所で活用され書道具などの保管もなされていたため、書道での活躍の機会が増えたのだろうということがうかがえる。樂美術館を見学した帰路には平安時代にかけられたとされる一条戻橋を通った。現在の一条戻橋は新しく修繕されたものだが、各名所や要所を訪れる際に行く時

の道や帰り道を工夫することで平安時代の歴史などに触れたり感じたりすることができるということにまた京都を直に歩くことの大切さを感じることができた。大徳寺でも同じように感じたのはやはり京都という街は人々の生活とともに古い歴史を帶び、過去と現在が共存しているということであった。二十以上もの寺があり、孤篷庵には茶室があることでも有名だが、千利休が増築したとされている三門の写真を私が撮っている最中に境内を走る若いランナーや犬とともに散歩をする老夫婦などを見かけ、過去と現在がさりげなく共存している景色はとてもよい心地であった。

過去の歴史やロマンをたどりながら現在すんでいる人々が暮らす日常を感じ、さりげない過去と現在の交錯を考察することのできたとても充実感のあるもので、もっと多くの場所へ訪れ、その地域の歴史や文化について学んでいきたいと思える旅であった。



伏見稻荷大社で感じた歴史と文化 —京都で見た日本文化—

1部 日本文化学科
2年J1組 2710191 藤嶋 ゆに

日本文化演習は、古都奈良・京都を巡ることで、日本の歴史や文化を体感できた旅であった。奈良と京都は今でも日本の歴史や古来の文化を垣間見ることができる場所であり、それらを実際に自分の目で確認することで日本の歴史・文化の奥深さを実感することができた。

六日間あった演習であったが、そのうちの二日間の自主研修が一番充実した体験として心に残っている。

一日中自由に行動することができるこの二日間で、私は友人と二人で京都市内を寺と神社を中心に巡った。私は京都を訪れるのが初めてだったので、有名な寺や神社を巡ってみた。寺や神社を巡ると同時に京都の町を実際に見て回ることができた。京都の町は、至る所に昔ながらの町並みが残っており、新しい現代的なものと日本古来の伝統的なものが共存していることが実感できた。

二日間で様々な寺や神社を訪れたが、中でも印象に残っているのは伏見稻荷大社である。伏見稻荷大社は稻荷信仰の中心となる神社であり、全国に約3万社あるといわれる稻荷神社の総本宮である。ガイドブックやテレビ番組でもよく取り上げられる京都の名所で

あり、私も目にしたことがあった。しかし、写真や映像で見ると実際に自分の目で見るとでは全く違うものであった。特に千本鳥居には目を奪われた。願い事が「通る」あるいは「通った」お礼の意味から、鳥居を奉納する習慣が江戸時代以降に広がったため、伏見稻荷大社には多くの鳥居がある。現代では約1万基の鳥居が山の参道の全体にならんでいる。朱の鳥居が数え切れないほど



並んでいる光景は圧巻であり、実際に中を通ると視界がほぼ朱一色になり神秘的な空間であった。写真や映像では感じることのできない迫力を感じることができた。そして、これが江戸時代からの習慣であるというところから日本の歴史が続いていることを感じることができた。また、稻荷神の使いが狐であることから、境内には駒狐が多くあり、伏見稻荷大社の特徴とされている。このようなところからも、日本独特の信仰の形を感じることができた。

二日間の自主研修では伏見稻荷大社のほかにも銀閣寺や金閣寺、三十三間堂や養源院など様々な場所を訪れた。それらのどの場所でも日本独自の歴史と文化を感じ、学ぶことができた。また、京都は日本の伝統的な建物や風景が現代的なもののなかに自然と溶け込んでおり、歴史と文化が今も息づいているを感じることができた。北海道にはないその光景を実際に自分の目で見て体感することで、日本の歴史と文化の奥深さをより深く感じることができ、充実した二日間であった。

演習全体を通して、日本の歴史や文化についての知識や関心をより深めることができ、とても有意義な旅にすることができた。演習は全部で六日間あり決して期間が短かったわけではないが、時間があつという間に感じた。特に京都は広く、回りきれていないところの方が多いと思う。いつかまた自分で京都を訪れることがあったら、今回訪れるべきなかった所も訪れ、また新たな発見をしたい。そして、今回得た経験や知識をこれから学びに活かし、より深めていきたい。

伝統と歴史の街「京都」 —札幌で生まれ育った私の異文化体験—

1部 日本文化学科
2年J1組 2710192 藤光 賢大

今回の日本文化演習では、普段では得られないような発見や体験が数多くあったが、そのどれもが伝統や歴史に裏付けされたものであり、非常に感慨深く、かつ学び多き旅であった。特に自主研修の二日間は、一日目は集団、二日目は一人で行動したのだが、ひとり旅も案外気楽で何かとわくわくすることも多く、また自分のペースで各地を巡ることができたため、自主研修は両日共に充実した一日となった。

一日目は最初に北野天満宮へ足を運んだ。二月二五日の梅花祭も近く本来であれば梅の花が咲き誇っているはずであったが、今年の寒波の影響でほとんど咲いていなかった。ちなみに梅苑の受け付けには梅の開花状況を知らせる張り紙がしてあった。

次に訪れた金閣鹿苑寺では特別公開の方丈を見学した。特に京都三美松の一つ「陸舟の松」は見事に船の形をしていた。



その次は太秦の広隆寺を訪れた。ここは渡来人である秦氏の氏寺で、靈宝殿にて飛鳥時代の弥勒菩薩半跏思惟像などを拝観したが、特に木造千手觀音坐像はボロボロに欠けた部分があったためはっきりと木で造られているのが目で見てわかり、これが木で造られたのかと驚嘆した。さらに広隆寺の近くにある東映太秦映画村にも足を運んだ。そこでは実際に撮影が行われており、本物の役者さんが村内を歩いていた。こういう施設があることも、伝統と歴史の息づく京都ならではの魅力ではないかと思った。



太秦から京都中心部へ戻るとき、京福電鉄嵐山本線（嵐電）の太秦広隆寺駅で数珠やお守り・仏像のフィギアを販売する自動販売機を発見した。この自動販売機の下部に書かれている説明書きによるとこの自販機は前世紀からのものであるらしく、朽ちたタバコの販売機を利用して幸福を呼ぶ縁起のよいものを販売しているそうだ。また昔の人は駅の中の民家を借り受け、電車を窓から眺めていたことも書かれていた。寺社仏閣を巡るだけではなく、街の至るところに目を向けることで京都らしい発見があった。

自主研修二日目は朝早くに上賀茂神社を訪れた。天皇陛下御回復祈願の記帳所が設置さ

れているのを発見したので記帳したが、この後に訪れた下鴨神社にも設置されていた。旅行中に訪れたお寺には記帳所は見当たらなかったことから、あらためて神社とお寺の違い、神道と仏教の違いを認識した。ちなみに神社にもお寺にも火災から文化財を守るために、放水銃なるものが設置されていた。上賀茂神社では、本殿特別参拝の際に神職の方が、よりご神域に近い場所へ案内するための御祓いをしてくださった。神職の方の格好や所作を近くで見ているとまるで平安時代のようでとても興味深く、また御祓いを受け本殿・権殿の前に通された後の式年遷宮や檜皮葺き社殿の屋根葺き替えについての説明も非常に勉強になった。良い体験ができたと思う。その次に訪れた下鴨神社ではみたらし団子の由来となった境内にある御手洗池を見学した後、神社のそばにあるみたらし団子発祥の店・加茂みたらし茶屋にてみたらし団子をいただいた。一つの串に団子が五つとなっており、一番上の団子だけが少し飛び出していて、これは人の五体を表しているそうだ。



その後は同志社大学のそばを通り過ぎて相国寺を訪れた。法堂と開山堂が特別公開されていたが、法堂の天井画「蟠龍図」には特に衝撃を受けた。なぜならどの位置から見上げても龍の目が自分を捉えているからだ。さらに「蟠龍図」は堂内で手を打つと音が反響しカラカラと鳴くことから、通称「鳴き龍」として知られている。もちろん私も手を打ったが、はっきりと鳴き声を聞き取ることができた。ガイドさんの反応からしてどうやら私の手の打ち方は非常に良かったようだ。

そして自主研修二日目の夜は祇園にある弥栄会館ギオンコーナーへ出向いて、茶道・琴・華道・雅楽・狂言・京舞の六つの伝統芸能を鑑賞したが、驚いたことに観客の大半が海外からの外国人観光客であり、日本人の姿はほとんどなかった。外国人観光客は世界各国から来ているようで、京舞で本物の舞妓さんが舞い始めると一斉に写真を撮っていた。日本人から見る日本文化と外国人から見る日本文化では物珍しさや興味深さという点において大きな違いがあると感じた。

今回京都を旅して気がついたことは、北海道よりも道幅が狭いということだ。当たり前のことではあるのだが、これは意外にも京都の街を歩いていると常に気づかされることだ。いつも札幌の街を歩き回る私にとっては多少のストレスを感じることが多かった。また京都は細い小路がたくさんあるが、そこにも車やバイクが押し寄せ難儀した。さらにお寺によっては境内も自動車が通行していたために困惑した。京都の街を散策するときは常に四方を警戒する必要があるだろう。

しかしそれはつまり、狭い道幅を広げることなく京都の古い街並みを維持してきたということでもあり、伝統文化を受け継ぎ維持していくということは、現代にはそぐわない不便さとの戦いでもあるのだと気づかされた。またいつの日か京の都を訪れたい。

美の象徴「金閣寺」

1部 日本文化学科
2年J1組 2710195 松尾 結

私は今回の日本文化演習で初めて京都を訪れた。団体研修の際には市内の観光名所と呼ばれるような場所にはあまり行かない事前に聞かされていたので、私は今回の自主研修ではあえて、これぞ京都というべき有名所ばかりを巡った。

まず初めにバスで金閣寺を訪れたのが、京都の先進的なバス停留所には驚嘆した。札幌市内のバスしか利用したことのない私は井の中の蛙だった。まずバス停がしゃべるのだ。さらには今現在バスがどのあたりを走っていて、あとどのくらいで到着するのかを教えてくれるという親切さ。札幌のバス停留所がとてもアナログなものに思えて仕方がなかった。カルチャーショックだった。



金閣寺に話を戻すと、私は三島由紀夫の『金閣寺』による印象があまりに鮮烈であり小説とはいえ、完璧なる美の象徴として、あんなにも一人の人間を虜にした金閣寺とは一体どれほど素晴らしいものなのだろうかと心から期待をしていた。荘厳なる佇まいとその神々しさで人々を魅了してやまない美しさ、だと思っていた。確かに美しい。だが、想像していたような神々しさや荘厳さは感じられなかった。あまりに金ぴかすぎなのだ。つい先日、再建されたかのような金ぴかさに落胆しなかったとは言えない。きっと焼失以前もあのように日の光に照らされてきらきらと輝きを放っていたのだろう。水面に移る姿さえきらきら輝いていた。私もその姿を想像はしていたのだが、私が想像していた輝き方とは違っていた。興ざめの感は拭えない。『金閣寺』の主人公である「私」をあれほどまでに魅了し、狂気に満ちた信仰心を抱かせるまでに至った美しさはそこにはなかったように思う。だがそこは世界文化遺産、どんなに期待と異なる部分があると、感動をしたのは事実である。私の中での金閣寺と実際の金閣寺の間で多少の誤差はあったものの、「金閣寺をこの目で見た」ということに満足した。

私がもう一か所、京都に行った暁には必ずや訪れたいと思っていたのが、清水寺である。「清水の舞台から飛び降りる」という言葉の意味を自らの身をもって知った。今は紅葉の季節ではないので、清水寺からのもっとも美しい景色を眺望することができなかつたのがとても残念である。それでも清水の舞台からの眺めは圧巻であり、素直に感動を覚えた。

今回、京都・奈良という日本の歴史が深く息づく二つの街を訪れ、今まで歴史の教科書やテレビなどでしか目にしたことがなかったような場所を巡り、改めて日本という国が歩んできた歴史やその文化に触れ、我々が学ぶべきものの壮大さに気づくことができた。日本文化を学ぶ上でとても貴重な経験ができたと強く感じた。



最後に清水寺からの眺めを載せて、私の日本文化演習レポートを終える。

関西での収穫 —日本文化を改めて考える旅—

1部 日本文化学科
2年J1組 2710198 三浦 莉奈

2月20日～25日の日程で行われた日本文化演習。普段文献でしか見ることのできない日本の文化を改めて肌で体感できた。

余談だが実は私が京都・大阪方面へ行くのはこれが人生4度目である。修学旅行以外にも、個人で2回旅行に行っているのだ。特に日本らしい町並みが残る京都は大好きで、また何度も行ってみたいという思いがある。今回の演習ではその3度の旅行でも行ったことのない場所へ足を踏み入れた。驚きと発見の連続であった、その一部を紹介する。

一番私の眼を驚かせてくれた場所は三十三間堂である。一歩足を踏み入れると、ひんやりとした空気が全身を包む（これはこの演習で行った寺社に共通して言えることだが、暖房などの設備がないため非常に寒い。そのぴんと張った空気が仏像や建物をより神聖に見せてくれるのだなと感じた）。そこにはおよそ千体の仏像が安置されており、私はその姿に圧倒され息をのんだ。自分の顔やら理想の人の顔に似て



平等院鳳凰堂

いる仏像があると言われているほど千体というのはとてもなく多く、確かにその一つ一つは顔かたちや体型、表情が違うのだ。繊細な表情のバリエーションには驚きっぱなしである。仏像保存のため写真が撮れず、平等院の写真で失礼する。ちなみに平等院は行くのが2回目だが、本堂に入ったのは初めてで、こちらも御本尊やまわりの壁屏絵にただただ感嘆するばかりであった。

次に興味をひかれたのは、最終日に団体研修で行った国立民族学博物館（通称みんぱくと言うらしい）である。ここは大阪万博の跡地に建てられた公園の敷地内にある博物館で、とにかく広い、広い。自由見学に割り当てられた2時間という時間はあっという間に過ぎ去ってしまった。オセアニアからアフリカ、西アジア、北アジア、東アジアと回ってゆき、時間的にアメリカとヨーロッパエリアを見ることができなかったのが残念でならない。私はこういった民族のさまざまな文化を見るのが大好きで、特に民族衣装や住居などを見るのが楽しくてたまらない。日本のエリアは最後のほうにあったのでだいぶ足早になってしまったが、気候や地形、そこから生まれ発展した宗教や生活様式による違いというものを

見比べて改めて実感した。

ご飯も旅の楽しみのひとつである。食というのも立派な文化であるが、この演習では思う存分京都らしい、というものを堪能できた。宇治での茶うどんにはじまり、湯葉やおばんざい、丹後地方での鮒しゃぶなど……。特に湯葉は苦手意識があったのだが、このたび大好きなもののひとつとなった。普段感じることのない日本文化的一面をここでも知ることができたと思う。

今回の演習は、日本古来の文化や世界の文化といった様々な視点から今に根付く文化を知ることができ、私の知識の一部となって人生を豊かにしてくれたと思う。特に京都は大好きな場所で、まだ行ったことのない場所も多数あるため、今後も個人的に旅行したいと思っている。



国立民族学博物館にて

みんぱくに見るリアル

1部 日本文化学科
2年J1組 2710199 三村 知世

古都「京都」を中心として関西地方を巡った今回の日本文化演習では、百聞は一見に如かずという言葉を痛いほど思い知らされた。普段、教室やインターネットから得られる情報は、あくまで他者による経験に過ぎない。文化というものは、自らが触れて、その目で見て、肌で感じて、嗅いで、聞いて、五感をフルに使ってこそ初めて自分の中に取り込むことができるのだと感じた。

そういった意味で感銘を受けたのが、最後に訪れた国立民族学博物館（以下みんぱく）である。私の短い人生の中で、博物館という物は見るだけのものとして定義されていた。しかし、このみんぱくでは、可能な限り展示物に触れて良いと言う。衝撃であった。

広い展示室の中には、11のテーマに分けられた民族資料がいっぱいに置かれている。しかし、それらにはガラスの檻が設けられておらず、楽器であれば鳴らし、家であれば入る等、本来その物の持っている役割を再現することができる。それは、現地に赴き、文化を取り入れるということの疑似体験であったと私は思う。擬似体験という点では、札幌市厚別区にある「北海道開拓の村」が私の中での基準であったが、屋外に村を再現し、ミニチュアの様な感覚で存在するそれと違い、実際に使用されていた資料を多く揃えたみんぱくは、展示の為に並べられながらも、まるでその空間を切り取ってきたかの様に錯覚させてくれるのである。そこに感じるのは、京都の古い寺院に足を踏み入れた時の様なリアルさであった。

では、なぜその様に感じるのだろう。みんぱくの展示物の、いったいどこに私はリアルさを感じるのだろうか。

それは恐らく、みんぱくの資料がみな、良い意味で不格好のまま展示されているからだと思う。



例えば、前頁の写真はオセアニアの展示場に置かれた、クック諸島民の教会衣装であるが、明らかにマネキンとサイズが合っていないのである。衣装の方がかなり大きく、特に腹まわりなど、生地が余ってしまっている。

また、右の写真は日本の展示場に置かれた縄飾りであるが、結び目が歪んでいるのである。この写真はできるだけ正面から撮影したものだが、右側の輪が完全に縦になってしまっている。



例に上げた二つの写真は、かなり不格好だ。しかし、それが良いのである。民族学の資料として、「第三者の手が加わってしまってはならない」という原則はもちろんだが、この生地の余りから、結び目の歪みから、私たちは想像をすることが出来るのである。

生地に余りがあるという事は、クック諸島の人々はこのマネキンよりもかなり恰幅が良いのだろう。それは、日本人との食生活の違いだろうか、では、実際にクック諸島の人々はどの様な体型なのだろうか。縄飾りが歪んでいるというのは、日本の古い絵ではあまり見られない。では、あれらの絵にはある程度の脚色がなされているのか。虚実皮膜の境目はどこにあるのだろう。といった風に、この不格好さから私たちはこれらが本来置かれていた場所の生活を感じ取り、想像し、展示の為に作られた物からは学べないリアルさを感じができるのではないだろうか。もちろん、中には複製や展示の為に作られたものもが在るのも理解しているが、多くの本物の中で、主張しすぎずに、想像を補うことが出来る様に置かれている為、そこで覚めてしまったりはしない。

みんぱくは、あの空間の中に世界中の生活を詰め込んでいる。世界の昔から今を凝縮するには狭すぎる空間であるが、人間が歩いて回るには広大な場所である。今回は二時間という短い時間での見学であったので、軽く一周しか出来なかったが、それでも沢山の疑問を生むには十分な時間であった。

こうしてレポートを書きながら、持ち帰った資料を整理している間にも、また新たな疑問がいくつか生まれつつある。民族学というものに今まで興味は無かったが、今回の見学でかなり面白いと感じた。是非ともまた機会を作り、今度は研究の為に、みんぱくを訪れてみたいと思う。

京都を中心に、関西で学んだ日本の心 —建築物と食文化—

1部 日本文化学科
1年J1組 2710205 矢野 倭奈

今回の研修旅行では、歴史深い日本の国宝や世界遺産などを見て回り、その文化を自らの目と肌で感じることができた。また、自主研修ではサブタイトルとして、「ここでしか食べられないもの、食べるべきものを食す」という目標を掲げ、京都・大阪・神戸をぐるりと回り、いろんなものを食べることができた。



3日目の自主研修では、まず金閣寺に行った。お釈迦様をまつった舍利殿「金閣」が特に有名なため、金閣寺と呼ばれているが、正しくは「鹿苑寺」という臨済宗相国寺派の禅寺だそうだ。この日は天気も良く、お寺の金色や水面に映ったそれをとても綺麗に見ることができた。1994年、世界文化遺産に登録された金閣は、日本を代表する建築物であると言えるだろう。私は京都を訪れたのは初めてのことだったので、金閣を見ることができてよかったです。



宇治での自主研修では、その地方で有名であるとされる茶うどんを食べようと、友達と下調べをして行った。目当ての店はすぐに見つかり、念願の茶うどんを食べることができた。京都ではにしんそばが有名だと小耳に挟んだことがあったので、メニューにあったにしんが載った

ものにした。友達は湯葉が載ったものにしていた。麺に練りこまれたお茶の緑色がとても綺麗で、帰りに宇治茶を買って帰った。関西のうどんはやはり薄味で、出汁が効いていたように感じる。

また、京都で絶対に食べたいと思っていたものに「おばんざい」がある。おばんざいとは、京都の日常のおかずで、京野菜や豆類、豆腐などを使った献立であり、京都の人々が

普段から食べてきた、質素で体によいおかずたちのことである。普段から「体によい」もの、例えば無農薬の自然食や低カロリーと謳われると気になってしまう質の私なので、これは逃すわけにはいかない。夕どきに行ったので事前に調べていた店は混んでいて、少し歩いてみると比較的空いている店を見つけたのでそこに入った。右上の写真のものが「おばんざい7種盛り合わせ」である。自分ではあまり食べることのないおからやひじきをつかったものが食べられて新鮮だった。しかし私が一番感動したのは「茄子の忘れ煮」である。忘れ煮とは初めて耳にしたが、一体なんだろうと思いつつ注文してみると、「茄子の忘れ煮は冷たいものになりますが、よろしいですか」と尋ねられ、どんなもののかいつも期待が高まる。出てきたものが、左の写真のものである。よくある茄子の煮付けに見えるが、触ってみると確かに冷たい。見てわかる通り、薬味のねぎや鰹節がかなりの量乗っている。店主さんが「忘れ煮とは、昔の人が茄子を煮ていることを忘れて放置してしまったのがきっかけでできた料理んですよ」と教えてくれた。食べてみると、かなりしっかりした味付けで、中まで味が染みている。しかし不思議なことに、しょっぱいとは全く感じない。使用している調味料の味自体が私の馴染みのものより薄味なのかもしれない。ねぎも辛くなく、美味しかった。他にもいろいろなおばんざいをいただいたが、どれも優しい味で、それでいて物足りないとは感じさせない。京の文化の奥深さを知った。



この旅行を通して、日本の歴史を感じることのできる場所や建築物、また食文化に触れることができた。自主研修日には神戸や大阪にも行ったが、私にとって初めての関西だったので、まだまだ見たいもの、行きたいところ、食べたいものが残っている。ということで、いつかまた訪れたいと思う。

本と世界を学ぶ

1部 日本文化学科
2年J1組 2710207 吉田 茜

歴史的建造物などを見る機会は、北海道に住む私にとって貴重な経験だった。資料館だけではなく、お寺など実際に中に入って見学したり話を聞く事ができた。教科書やネットなどで学ぶよりも現地に行って話を聞く、歩いてみるなどをする方が得られるものが本当に多いし、雰囲気など直接行かないと解らないものが体験できる。

仏像や寺社などは中に入って見る機会が少ないので実物の大きさに驚いた。特に萬福寺を見学した時に住職さんのお話を聞きながら中を案内してもらった。そのとき目の前でお経を簡単にだが、誦んでくれた。このお寺は隱元禪師が建てたものなので儀式作法はそのまま中国のものを継承している。だから、中国語で節のきいたまるで歌をうたっているような感じだった。その他木魚の原形となる開版（写真右下）や七福神の布袋さん、韋馱天像、四天王なども見た。やはり修行僧のための禪専門道場なので暖房がなく、本当に足元が寒かった。

色々な場所を見学したが、一番印象的な建物が最終日に行った国立民族学博物館（以下、民博）だった。飛行機の時間があるため3時間ほどしか見学できなかつたが、正直言って1日かけてじっくりと見学したかった。何故かというと世界の色々なものがここにあるので3時間では少し急がないと全て見終わらないからだ。



左の写真は、民博の一部で、このように世界の様々な民族の伝統や文化がつまつた面白い場所である。地域別の展示では、もちろん日本の伝統文化やアイヌ関係のものも置いてある。その他に見るだけではなく触る事も出来るので、実際に手にとって楽器を鳴らす布などを触ってみて感触を確かめたり他の博物館ではありえない体験が出来る（一部触れないものもあるが）。後、すぐ近くに万博記念公園があるので岡本太郎が制作した太陽の塔も見る事が出来た。左が正面（未来）右が裏面（過去）である。初めて近くに行ったが見上げないと見えない大きさだった。



最後に少しだけ自主研修での出来事について記す。自主研修では京都市内にある神社を巡った。京都は意外と広く移動時間がかかってしまったため5か所ほどしか行けなかつたが、ある場所では春の訪れがあった。今年は開花が遅れているらしいので見られないかと思ったが、北野天満宮ではちらほらと梅が咲いていた。



白梅



紅梅

自主研修を含め日本、世界の伝統や文化を学んだ5日間であった。特にフィールドワークの重要性を実感した5日間でもあった。様々な場所を行ったが、平城宮跡を歩いてその広さを実際に知ったり、仏像や寺社を見学したりと大学の講義やネットでは学べない、フィールドワークだから出来る貴重な体験が沢山あり、充実した研修旅行を過す事が出来た。また機会があれば京都だけではなく日本の各地域に行き文化や伝統を学んでいきたいと思う。

京都の飲料に関する文化 —宇治茶を中心に—

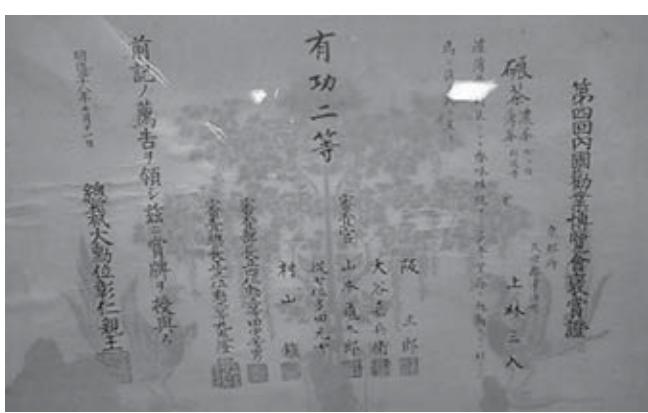
1部 日本文化学科
2年J1組 2710209 吉田 智哉

京都は古代より「巨大な水甕」と称されるほど水の豊かな土地であった。その正体は膨大な地下水にある。総量は211億トンとも言われ、その規模は琵琶湖一杯分にも相当するという。それだけの量の地下水が存在するのだから、まさしく「水上都市」と呼ぶにふさわしい古都だ。水が豊かな地域では、やはり水を使った文化が発展する。豆腐や湯葉といった食べ物はもちろん、友禅染や庭園造り、更には寺社の建立や都市の計画にまで水が影響を与えていた。茶や酒といった飲料への影響は言うまでもない。



京都の茶と言えば宇治茶が最も有名であろう。日本に茶が伝來したとされる時期は平安初期、嵯峨天皇の時代とする説が有力だが、京都の宇治に茶が持ち込まれたのは南北朝末頃とされている。その存在と品質が認知されてきたのは室町時代はじめ。当時の上流階級で流行っていた、梅尾産の茶を当てる「鬪茶」というゲームがあったが、宇治の茶は「本茶」である梅尾産の茶に勝るとも劣らないと評され、一躍脚光を浴びる。その評判はまたたく間に広まり、宇治七銘園が開かれ、「宇治茶」としての名声を確固たるものにしていく。茶の湯が天下人を中心にもてはやされるようになった安土桃山から江戸時代にかけて

宇治茶の地位はますます高くなっていく。その年の良質な新茶は将軍がまっさきに口にされるものとして江戸に運ばれた。これは将軍が宇治の茶園を直接管理していたために可能だったことである。こうして将軍家に保護された宇治茶は、てん茶の製造を独占し、高級茶の代名詞となっていました。



この頃、宇治茶師として茶の世界で活躍したのが上林三入である。宇治川下流の楨島村、今西家に三右衛門という名で生まれたが、やがて宇治郷の藤村家に養子として入り、三入と名乗るようになる。楨島を介して宇治川の向こうにある伏見には、有力な武家が軒を並

べ、賑わっていた。三入は、ここで取り巻きの大名たちを中心に、多くの武将たちと交流を持った。三入へ宛てたとされる書状には、当初から藤村と上林の両方の苗字が用いられていた。寛永15年、家督を二代目に譲ると、自らは三休と称するようになる。以後の歴代も隠居後は三休を名乗ることが通例になった。初代三入は万治3年、92歳で大往生を遂げた。三入家はその後数十代続き、今でも三星園上林三入本店として現存している。



もう一人、茶を語る上で欠かせない人物が、宇治製煎茶を完成させた永谷宗円である。江戸時代当時、てん茶は上流階級が独占し、庶民が飲む茶と言えば粗末な製法で作られた「煎じ茶」であった。てん茶の製造は宇治の特定の茶師にのみ許可されていた。それ以外の者が作ることは違法だったのである。宗円はなんとか法に触れることなく、優れたお茶を栽培することはできないか、優れた煎じ茶を製造することはできないか、試行錯誤した。この時、ヒントになったのが「折物」と呼ばれる、てん茶の間引き葉であった。抹茶とも煎じ茶とも違う黄色の茶に、宗円は新しい茶の形を見た。そして苦心の末、宇治製煎茶を生み出した。針状に細くよれ、鮮やかな濃緑色の葉。水色は澄んだ黄緑で、適度の渋み、苦味に、旨み、甘味が調和した、形、色、香味共に優れた煎茶を作り出したのである。

宗円は保守的な京都を離れ、江戸にその販路を開拓しようとした。果たしてその目論見は成功し、宇治製煎茶が庶民の間に広まっていった。

この成功は当然、宗円に多くの富をもたらした。宗円はこの富をもとに宇治周辺の湿地灌漑工事を行い、村民から「千田大明神」と称された。宗円が98歳の長い生涯を終えた後も人々は彼の功績をたたえ続け、今でも「茶宗明神社」として目に見える信仰の形として現存している。

茶一つとっても、様々な人物の努力と苦労があり、成り立っている。豊かな地下水がなければ、このような素晴らしい文化は生まれなかつたはずだ。京都の長い歴史と文化は、水と共にある。

私が感心したこと —戦国時代に縁のある場所—

1部 日本文化学科
2年J1組 2710213 渡辺 航平

戦国時代の歴史が好きな自分は、「京都に行くなら、本能寺と山崎には行かない手はない。そして山崎に行くなら、羽柴秀吉と明智光秀が我先にと目指した天王山にも行くべきだ」と思い、先生方について行く形で、山崎に行くことにした。

JRを山崎駅で降りて、大山崎町に到着。しばらく進み、踏切を超えた先に、入口はあった。道はと言えば、30度はあるのではないか、と思うほどに傾斜のきつい道が延々と続くものであった。至る所に大小の石が埋まっており、転んで怪我をする危険性がとても高い。階段はあるのだが、それは一段一段が非常に高い(50cmを超えるぐらいか)。途中に休息地点は一か所のみ。運動不足気味な自分にとっては、「これは何の修行だ……」と思い、苦しい顔にならざるを得なかった。一時間近くかけてようやく山頂に到着。そこにあった高台を登ると、そこには辺りを一望できる、見事な景色が広がっていた。あらゆる建物が小さく見え、淀川も見える。かの羽柴軍、明智軍が地の利を得るために、この天王山（途中まで舗装されてもあの急勾配、悪路。当時は今以上にひどかったと思われる）を陣取ろうとしたと思うと、昔の偉人たちには頭が下がる一方である。残念ながら私の体力が持たなかったため、行く予定だった場所の一つの洞ヶ峠（山崎の戦いの最中、筒井順慶が日和見をしたという伝説がある峠）は断念した。



JR 京都駅に戻った後、私は既に疲れていたが、是非行かねばと痛い足を引きずり、本能寺へ向かった（二日前にも行ったのだが、その時は時間が遅く、既に閉門していた）。到着すると、そこでは織田信長ゆかりの品が飾られているという展示会を行っていた。入場料を払い、入ってみると、そこには家臣の森蘭丸の大きな太刀や、信長の具足など、ここでしか見られないような非常に貴重な品のオンパレードであった。戦国時代が好きな人なら行かずにはいられないものである。

今回の研修旅行では実際に戦国時代ゆかりの場所、物を実際に見ること、足を踏み入れることができた。



「古都」京都の「今」 —日本文化と西洋文化の共存—

2部 日本文化学科
2年J1組 2810105 井上 優太

二月の末、日本文化演習に参加して関西方面に行くこととなった。団体研修では奈良県の大神神社や第十代天皇の古墳などをはじめとし、京都府の平等院鳳凰堂、黄檗山萬福寺へ行ったり二十三日には丹後地方にて舟屋群を見学し、古くから日本の名所として知られる天橋立も見物した。最終日には大阪府にある国立民族学博物館で世界中の様々な文化に触れ、その多様さや日本文化との違いを改めて実感させられた。

さて、この研修旅行の要となるのが二十二日と二十四日、この二日間の自主研修であるが計画を立てたまでは良かったものの、思った通りに事を運ばせることが出来ず、反省の多い二日間であったと思う。

自主研修の主なテーマは日本文化と西洋文化が京都でどう共存しているのか、という点である。「古都」と呼ばれる京都だけに、清水寺や金閣寺などの日本の建築物や文化財などに目が行きがちだが、それらだけが京都の姿ではないだろうと思い、日本の歴史的建造物だけでなく、京都の中に形として残された西洋の文化や建造物も巡ることにした。そうすることで日本文化と西洋文化の差異を考えたり、その二つの文化が今の日本にどう影響を与えていたのかという事を探ろうとした。そこで二十二日、朝の九時に嵐山のさが人形の家へと入ろうとしたのだが、冬季休業中により断念せざるを得なくなつたので急きょ予定を変更し、天龍寺へと向かった。はじめは法堂天井の雲龍図を鑑賞しようと思ったが、水曜日は公開日でなかつたので見ることはできなかつた。だが大方丈の前を通りがかった時、法堂のものとは違つた雲龍図が展示されていた。その龍は力強くこちらを睨んでいるような錯覚に陥らせ、とても威圧感のある作品であった。大方丈の雲龍図は明治期に活躍

した画伯によって描かれたものであり、損傷が激しいために毎年二月にのみ展示されている貴重な作品であると説明を受け、少しだけ得したような気分になつた。また曹源池庭園も見事な景観で、約七百年前に作られた当時からその面影を残しており日本で最初に史跡・特別名勝指定されたと知り、その変わらない景色を眺めているうちに七百年前にタイムスリップしたような感覚に陥ってしまった。

次に西洋文化に触れるべく、京都嵐山オルゴール博物館に足を運んだ。アンティークな雰囲気の建物に入ると優しく、どこか懐かしさが込み上げてくるような、オルゴールのメロディーに迎えられた。二階に上がると、シリンダーオルゴールやディ



スクオルゴールなどが並んでおり、しばしその音色に耳を傾けていた。なかでも特に興味を引いたのが西洋のからくり人形、オートマタである。ねじを巻くとオルゴールを奏でながら人形が動くという代物で、その動きはゆっくりとした感じではあったがまるで生きている人間のようにリアルであった。「画家『ピエール』」という作品を例にとると、単に筆を運ぶだけでなく瞬きをしたり肩をすくめたりなど敢えて無駄な動きを取り入れることで、人間らしさを醸し出している。

博物館員の方曰く、元々は懐中時計のアラーム機能として考案されたオルゴールであったが、エジソンの蓄音器がまだ発明されていなかった時代では、いつでも好きな時に音楽を聴けるという点が注目され、次第に大きくなつていったのだそうだ。さらにからくり人形にオルゴールを組む込むことにより、自動的に動く人形として誕生したオートマタは、どこまで本物の人間に近づけるか、ということがその国の科学技術の高さを示す水準とされ、競って作られるようになったという。その他にもオートマタには黒人や貴婦人、道化師をモデルにした作品があり、その当時の服飾文化や時代背景を風刺したものを使うかがい知ることもできるデザインとなっていた。

科学技術の進歩により、ぜんまい式のオートマタが作られるることは少なくなつてしまい、現代ではオートマタ作家も激減している。スイスのフランソワ・ジュノもその数少ない職人のうちの一人だ。彼の作品「世紀末の月」は昔ながらの方法や仕組みで作られており、ゆったりと、そして機械仕掛けとは思えない柔らかな動きで見る者を驚かせた。しかし、全てのオートマタはオルゴールが止まると同時に、動きを止めて人形に戻ってしまう。再びねじを回してもらうその時まで、じっと待ち続けるオートマタ達のその姿は健気で、どこか儂げに見えた。

自主研修の二日目、二十四日はまず詩仙堂に行ってみた。バスに揺られて一乗寺下がり松町で下車、歩いて十分のところに建っていた。都から離れたそこは、とても静かで不思議と心が落ち着く場所であった。天井を見上げながら建物の中を歩いていると、三十六人の詩人の肖像画が四方の壁に飾られていることに気づいた。元々は凹凸窓と呼ばれていたが、建物の中に掲げられた中国の詩人たちの肖像画から「詩仙堂」という名が来ているのだと初めて知り、納得がいった。また、敷地内の庭園は人の手が加えられたと感じさせない、神秘的な雰囲気が漂う風景であった。さらに庭園内に歩を進めると、どこからかカコーン、と心地よい音がした。音のする方へ行ってみると、そこには添水があり、絶えることなく一定のリズムを刻んでいた。

今回の自主研修では予定通りに行動できなかったこともあり、とても時間が足りないようを感じた。また京都を訪れる機会があればもっとじっくり名所や史跡を観察したいと思う。



神戸の魅力

2部 日本文化学科
2年J1組 2810107 江川愛也音

二月に参加した日本文化演習は、宇治平等院や朱雀門など高校の教科書に載っていたような、歴史にも価値ある場所に行くことができ、日本の文化の素晴らしいところを感じることができた旅だった。六日あった日程で一番心に残ったのが、三日目の自主研修日である。一日中好きなところに行けるということで、私は前々から気になっていた、神戸に一人旅をしにいった。私は団体行動が正直苦手で、高校の時の修学旅行も一人ではぐれて見ていたり、別のところを見ていた。そして班でまわる計画なども任せで、行きたいところだけ言って、人の後に着いていく……という他力本願であった。今回は自分で計画し、実際に現地に行くということで慣れない土地に行くことに少々不安があったが、それよりもわくわくとした気持ちが大きかった。

まず初めに、JR三ノ宮駅で降りて北野異人館に行こうとしたが、近くに生田神社という恋愛成就の神様として知られる神社があったので行ってみた。日本書紀に「神勅で建てられた」と記されている。繁華街に建っているので少々違和感があったが、願い事をし、次の北野異人館に向かった。

異人館は神戸観光の定番であり、たくさんの観光客で賑わっていた。二十近くの異人館が連なっていて、風見鶏の館と萌黄の館を行った。風見鶏の館は、ドイツの貿易商の私邸で唯一のレンガ張り。魔よけの意味がある風見鶏は北野町のシンボルである。萌黄の館も淡いグリーンの外壁で、まるで外国にいるような気分になった。中も、



古い時代の日本の家とは全く異なり、文化の違いを確認できた。

後から次々と他にも行きたいところが出てきて、時間が足りないと思うくらい素敵なところだった。

次に、南京町へ行った。横浜、長崎とともに日本三大中華街に数えられる。飲食店や雑貨店、飲茶などを売る屋台で賑わっていた。

ここは昼に行くのと夜に行くのでは印象が違って、中華街の雰囲気を楽しむ事が出来た。小腹がすいても、たくさんの屋台があるので、色々迷ってしまう。私は曹家包子館いうところで豚まんを食べた。シイタケと肉汁があふれ出て、本当に美味しかった。豚まんのお店がとても多いので、食べ歩きに適していると思った。

南京町は、東西南北それぞれ四つの門があり、東の長安門、西の西安門、南の南楼門があり、北には中国獅子がある。この獅子は左右微妙に姿が違う。この四つの門が人々を迎え入れてくれている。南京町は、とても活気があって楽しい気持ちになった。この日は三回南京町に訪れたが、何回行っても飽きることはないと思わせるところであった。お土産も面白いものが多く、人に喜ばれそうなものばかりであった。

神戸は、近くに北野異人館や、紹介していないが、北野工房のまちという、ものづくりの体験が出来るところやトアロードなど買い物ができるところが密集している。近くにも海があり、メリケンパークなどの施設もあるので、たくさん楽しむことができる。しかもただ楽しむことだけでなく、中華街は中国の雰囲気、北野異人館はヨーロッパの雰囲気を楽しむ事が出来て、日本にいながら外国の雰囲気を味わうことが出来た。



文化に触れる 6 日間

2部 日本文化学科
2年J1組 2810113 沖本 和恵

私が、この旅行に参加しようと考えたのは、6日間で奈良や京都などに訪れ、直接日本文化を学ぶことができると思ったからである。

まず、最初に見た、日本最古の神社である大神神社では、「ご神木の横に卵を投げないでください」と書かれており、何故だと疑問に思ったが、御祭神の大物主が蛇神であり、酒造りのであるため、卵と酒を供えることを知り、納得した。次に行った崇神天皇陵では、初めて間近で古墳を見た。本や映像で古墳の大きさは解っていたが、近くで古墳を見てその大きさからどれだけの権力があったのかを改めて知ることができた。



2日目の平城京跡を散策し大極殿をガイドさんと一緒に見学した。遺構で当時の形に近く復原した大極殿には感動した。建物や装飾の玉を5行色で塗装したり、屋根瓦の黒色は出土遺物に忠実に復元したり、屋根の上の飾りを法隆寺の宝珠を参考にしたりと当時の平城京に近いであろう姿に復元されていた。展示コーナーでは宮殿の暮らしの再現したコーナーや遺物コーナーがあり、当時の暮らし方がわかりやすかった。



10円硬貨に描かれている平等院は鳳凰が両翼を広げた姿を模して左右対称に作られており、外から阿弥陀如来坐像の顔を見る能够である。平等院が水面に映る姿は美しかった。

四日目には、丹後半島の伊根で舟屋を見学し



た。漁をするために舟屋が海のぎりぎり手前に建っており一階は船を出せるような形になっていた。今までこのような漁をしている地域を訪れたことがなかったので貴重な経験となった。

最終日に行った、国立民族学博物館では、展示品がそれぞれの地域、言語、音

楽に分けられている。特定の地域の文化、衣食住の資料が展示してある。私が一番興味をもったのは、オセアニアの展示コーナーである。少し前にオセアニアの暮らしと文化に関する本を読んでいて、写真ではなく実際にオセアニアの文化に関する資料を見たいと考えていたので、石貨や羽毛貨、船、ラピタ土器などを直接見ることができて勉強になった。

自主研修では京都市内を観光した。研修1日目は清水寺に行き、清水の舞台からの景色を楽しんだ。その後に嵐山に行き天竜寺、竹林の道を通り野宮神社をめぐった。2日目は清水寺から清水坂から産寧坂、二寧坂、ねねの道の石畳を散策し、八坂神社を行った。八坂神社は、朱塗りの西楼門や、祇園造という珍しい建築様式の本殿など、華やかな文化財を多く所有している。その後バスに乗り、学問の神様として親しまれる北野天満宮へ行った。北野天満宮は梅の名所なので楽しみしていたが、残念ながら、ちらほら咲きであった。また梅の季節に京都を訪れる機会があれば見たいと思う。

何度か関西地方を訪れたことがあったが、今回は5泊6日の長めの旅行であったことと、今まで訪れたことのない場所に行くことができ、とても充実した6日間になった。写真や映像などの資料だけではなく、自分の目で直接見ることで、新たな発見、更なる文化への興味をもつことができた。この経験を活かし研究していきたいと思う。

一人旅を楽しむ

2部 日本文化学科
2年J1組 2810132 樋口 明香

6日間に及んだこの度の関西研修旅行。日本文化学科の学生として、自らの持つ知的好奇心を大いに満たすことができた研修であったと思う。平城宮や宇治平等院、萬福寺など様々な場所の見学を経て、日本文化の息遣いを肌身に感じられた。この旅には2日間の自主研修が用意されており、個人で自由に行きたい場所をまわることができた。私はこの自主研修日の一日を、人生初の一人旅への挑戦に充てることにした。

私は、以前京都を旅行した際に好印象をもった嵐山に再び訪れたく思い、嵐山を中心とした名所への旅を計画した。当日の朝は、不安と好奇心との混ざり合った気持ちを抱え嵐山行きのバスに揺られた。

到着してすぐ、嵐山のシンボルとして知られる渡月橋を往復し、高まる気持ちを落ち着かせるべく嵐山の景色を眺望した。文永9年、この橋の上空を移ろう月を眺めた龜山上皇が「くまなき月の渡るに似る」と述べたことがその名の由来であるという。慣れない地図を広げて向かった先は、国の史跡・特別名勝指定第一号の曹源池庭園を有する天龍寺である。暦応2年、足利尊氏が夢想国師を開山として創建し、平成6年世界文化遺産に登録された。天龍寺の名物である法堂の天井に描かれた雲竜図は、春の特別公開でしか見られないため見物はできなかった。天龍寺は創建以来8回の大災に見舞われ現代の堂宇の多くが明治期の再建であるらしい。時間があれば拝観コースをすべて周ってみたいと思うほどに敷地は広く、庭のつくりに感動しながらゆっくりと足を進めることとなった。



その後、ふらふらと寄り道をしてみたり地図を読み違えて迷子になったりしながら常寂光寺を目指した。藤原定家の別荘「時雨亭」があった地とされている常寂光寺は、山奥と呼ぶにふさわしく石の階段が延々と続く息の切れる場所であった。多宝堂は重要文化財に指定されており、百人一首でも有名な小倉山いっぱいに広がる紅葉の名所でもあるようだ。この旅全体を通して思ったことであるが、春や秋には名所と呼ばれる場所も冬は静けさをまといしっとりと佇んでいるような印象を受ける。違う季節に訪れたならばまた印象は違うのであろう。常寂光寺の奥から

は嵐山の地を見下ろすことができ、とても爽やかな気持ちになったと同時に、この一人旅はきっと成功すると感じさせてくれた。

次に向かったのは、常寂光寺から程近い落柿舎である。芭蕉の門人として知られる向井去来の遺跡として知られ、芭蕉が『嵯峨日記』を誌した場でもある。庭の柿の木40本の実が一夜にしてほとんどおちつくしてしまったというエピソードから落柿舎の名がついたとされている。庭園には去來の句が書かれた数々の碑が立っていた。柿をモチーフにしたお土産が売られていたり投句箱が設置されていたりと、和やかな雰囲気が流れる場であった。私も記念に一句詠んでいこうかと思い立ち止まったがそうはうまくいかず、芭蕉や去來のようにはいかないなあと一人苦笑したものである。落柿舎を出て少し歩いたところには去來の墓もあり、その周りにもたくさんの俳句が書かれた碑が立っていた。西行法師の出家当時の草庵の跡とされる西行井も見ることができた。



一人気ままな足取りでの嵐山散策に満足した私は、計画していたわけではない八坂神社のあたりへと足を延ばしてみることにした。建仁寺へ足を進めるも道に迷ったために拝観時間に間に合わず、戸の隙間から中を覗き見るという悔しい結果になってしまった。いつか個人的に京都を訪れた際には、隙間から見たあの風神雷神図の復元を直に目にし、天井に描かれた双龍図に感嘆の声を漏らしたいなどと考えている。

自主研修の2日目は中川先生に率いられ西陣や友禅といった着物の文化に親しむことができたが、やはり団体と一人では楽しみ方が違うものなのだと身に染みて感じことになった。当たり前のことながら、一人旅はすべてが自己責任であった。どこ行きの何時のバスに乗りどこで降りるか、どこを巡って何を楽しむか、度々自分がどこにいるのかわからなくなり地図や観光案内図と何分もにらめっこしなければならなかつた。バスでうっかり寝過ごしてしまいそうになったり、感動や発見を誰かと共有したいという思いもわずかながら抱いたりした。しかし、見知らぬ土地でただ一人どこかに寄り道するもよし、考えごとをするもよし。一人の旅であったとしても、お土産は誰に買おうとか帰ったらこの話をしてあげようとか必ず誰かを思いながら歩くものなのだと、なんだか意外な事実を発見した気がした。また、この旅行を通して、知識は旅を物見遊山にしないための道具であると深く感じた。同じ場所に見物に行くとしてもその場所にまつわる歴史的背景や由来や意図を知っているか否かでは、ずいぶんと見え方も変わり感動の質も変わる。団体研修中、先生方やガイドさんが豆知識のようにわかりやすく教えてくれる情報があったおかげで、私は研修を倍楽しめたように思う。一人旅だけでなく複数人でも旅する機会を得た際には、事前の基礎知識を蓄えて旅を存分に楽しめるよう工夫を試みたい。

この研修旅行が今後の学生生活においても実りあるものとなるよう、ここで得た経験や知識を活かしていきたいと考える。

自分の足で見て周る京都

2部 日本文化学科
2年J1組 2810143 山内 愛生

今回参加した日本文化演習は、日常の風景の中に日本の積み上げてきた歴史や文化を色濃く残す京都を中心に関西の各地を巡り母国の歴史や文化を紙面ではなく実際に触れ、学びその歴史や文化の奥深さや面白さを再認識する良いきっかけとなる旅になった。

六日間という長いようでとても短い期間はあっという間に終わり、何処を見て回るのにも時間が足りないと思うばかりだった。その六日間の内二日間は自主研修で時間を最大限有効活用し自分の行きたいと思った場所を巡ることができた。この二日間は旅行の中で一番疲れたが、一番充実した時間であり記憶にも濃く残る日となった。

一回目の自主研修は時間に縛られることも無かったので一人旅に踏み切った。悩みに悩んだ末全く候補にも無かった伏見へ行こうと思い決行。行きたい所は山ほどあったのだが、あっちには行けたけれどこっちには行けなかつたなどと悔しい思いをするならいっそ別な場所を無計画にぶらり旅するのも良いかと思い立った。自分の持っている地図には伏見の辺りが載っておらず、電車など交通機関もわからないという行き先不安しかない出発だったが、最寄駅まで友人と行き駅員さんに乗り換えなどを尋ね友人と別れ、いざ一人旅。乗り換えなど教えて頂いた通りに行くと目的の駅にはたどり着くことができた。そこからは旅行案内板の指示通り進み、まず着いた場所は伏見稻荷大社である。稻荷とつくだけあってそこにいるのは狛犬ではなく狛狐。本堂でお参りを済ませ多くの鳥居を抜けて行きさらに千本鳥居を抜けていく。その風景はまるで吸い込まれるような異次元へ迷い込むのではないかと思うような現離れした景色のように感じた。どこまでも続く気がしてすこし恐いとも思うような景色だったが鳥居の朱と鳥居の間から入る陽の光とで眩しくらい綺麗な風景でもあった。一回目の自主研修で私が一番時間を割いて見て回っていたのはここ伏見稻荷大社である。鳥居の立っている方へ立っている方へと進んでいき三ッ辻、四ッ辻と進んで行き参拝しながら進んだ。山頂までは233メートル。ここまで来るとすれ違う人も疎らで時々自分が道を間違えて迷ったのではないかと不安になった。清明舎や滝などもあり参拝や建物を見ながら山登りしていると大体2~3時間ほどかかった。下った先にあったお店であめ湯なるものを頂いた。生姜湯と飴の甘みが混じった様な味で山登りした後のちょっと疲れた身体にはとても優しい味だった。その後戻っておもかる石に挑戦してみた。一回目はとても重く感じどうやら私の願いは叶わないみたい。二回目をやってみると一回目よりも軽く感じ狐につままれたような不思議な体験となつた。

その後伏見まで來たので有名所の酒造を二ヶ所、黄桜と月桂冠を訪れた。日本酒にはそこまで詳しくないが、作られる工程や使われていた道具の展示などそれはとても興味がひ

かれ、思いがけず見ごたえがあり楽しいひと時となった。黄桜でのカッパの話や月桂冠大倉記念館でのきき酒など同じ酒造でも違ったものが見られとても楽しかったのを記憶している。その後はぶらりと坂本龍馬縁の地である寺田屋、伏見土佐藩邸跡地の石碑、御香宮神社などの町並みを見ながらゆっくりと歩いてまわった。

二回目の自主研修は先生、留学生と一緒に西陣へ行った。西陣織工芸美術館松翠閣は暖簾から西陣織できており作りがとても凝ったところだった。襖に貼られた西陣織もとても綺麗でパッと見絵にも見える綺麗さだった。季節によって襖が替わるそうなので今回冬に訪れたが機会があれば別の時期にも訪れて見たいと思った。西陣織で作られたものはどれも綺麗で光の加減や見る角度によって同じ作品でも見え方が変わり織物というよりも一つ一つが手間も時間もかかった芸術作品だった。横山大観など有名な日本画家の作品も西陣織になっており絵に見える。それも近くで見ると織目が見えようやく織物と認識できるほど糸は細く何度も「これ本当に織物ですか?」と確認するくらいだった。洋画も西陣織になっていたりと一括りに西陣織と言ってもそれぞれの画家のタッチの違いなども細かく表現されていて織物の可能性の幅を感じるものであった。その中でも最も感動したのは蓄光の糸を使って織られた作品で壁を埋め尽くす大きさと迫力、徐々に照明を落としていたときに同じ作品なのに見え方の変わる素晴らしさ、ブラックライトを当てたときのまた見え方が変わる作品の移り変わりがなんとも言えず綺麗だった。安易に綺麗や素敵、素晴らしいなどの言葉しか頭に出てこないほどの感動であった。きっとこの感動は文にも写真にも表せないので是非機会があり和服等興味ある方は自分の足で訪れて自分の目で見て堪能してもらいたい。

その後工房へ行き実際織っている所を見学させていただいた。使われる糸は髪の毛よりも細く触ったらすぐ切れるのではないかとさえ思えた。銀糸は見た目に反してとてもやわらかく触った感触があまりしない糸であった。

続いて向かったのは友禅美術館。西陣とはまた別な美しさにあふれていた。上の階へ行くと実際に職人さんが柄を描いているところだった。そこにある着物や生地はどれも綺麗で同じものは一つもなく目を張るものばかりだった。体験ということで場所を移動し皆で香袋を作った。すでに調合された三種類の匂いの違うお香をさらに自分好みの匂いへと合わせるというもので、みんなで作ったものをそれぞれ交換しながら匂いをかぐと同じものを使っていても三種のそれぞれの量の違いからどれも匂いが違って面白かった。その後先生や留学生の方とは別れ平安神宮に行った。桜の名所となっている神宮だが冬であることもあり桜は蕾もまだまだ小さかった。機会があったら桜の時期に訪れたいと思い自主研修を終えた。

京都にはまだまだ見て回る場所もあり時間はいくらあっても足りないくらいである。行った場所でも見落としてきたものも多くあるのではないかと思う。何度も行つても違う楽しさや発見があると思うのでまた機会があり、行くことがあれば今回の旅行で得たものを活用しまた新しい発見をし、自分の知識などの積み上げができればと思う。

三十三間堂拝観記 —圧倒される仏教芸術—

2部 日本文化学科
3年J1組 2809101 青山 瑞紀

私は自主研修の日に三十三間堂を見学した。事前レポートでも計画していたが、徳永先生が行かれるということだったのでご一緒させていただいた。以下はその拝観記である。

三十三間堂（正式名称：蓮華王院本堂）は、後白河天皇が退位して上皇となり、院政を行っていた時期にその御所内に建造されたものである。名前にある「三十三間」とは建物の広さを表しており、一間ずつ進むごとに太い柱に遭遇する。80年後の鎌倉時代にいたん焼失したが、間もなく後嵯峨天皇によって当時最新技法を取り入れられて本堂が再建された。華美な外見・内見の装飾が剥がれ落ちても、建物は現在までしっかりと残っているのはそれゆえだろう。

三十三間堂は、室町幕府第6代将軍足利義教によっても修復が試みられている。義教は京都の禅寺に寄付を命じ、屋根の葺き替えや中尊・千体仏（千手觀音立像）の修復など約5年の歳月を費やしてその再建に手を尽くしたのである。

ところで、中尊と千体仏の製作は、後嵯峨天皇の再建時に仏師運慶の長男である湛慶を中心として進められた。しかし現在、湛慶作と判明している千手觀音像が大阪博物館・京都博物館・東京博物館にそれぞれ貸し出され、さらに他の千手觀音像も順番に修復されるため、実際に堂内に安置されているのは残りの觀音像（いずれも重要文化財）と、湛慶作の中尊・千手觀音坐像（国宝）である。

一般に寺院では本尊を持つのが普通であるが、三十三間堂は異なる。千手觀音立像に中尊の合わせ、1,001体で本尊を構成しているのである。また1,000体の觀音立像は、湛慶をはじめとする多くの仏師がその製作にかかわっているため、一つ一つの仏像の顔に微妙な違いがみられる。これについては、「自分の探している人が見つかる」とか、「自分と同じ顔が見つかる」とかよく言われる。ということは、「誰の顔でもあるの？」と妙な疑問も抱いていた。いずれにせよ、三十三間堂を訪れた人なら、誰もが自分や知人の顔を探すことだろう。私も探してみたが、最終的には全部同じ顔に見えてくる。そもそも觀音立像は、10段50列にも及び、堂内が薄暗いこともあって、実際にはその顔がはっきり見えるものは少ないのである。

さて、千手觀音像である。立像・坐像ともに共通するのは、その正式名称が「十一面千

手観音」であるように、観音様の頭をよく見ると10の小さな顔が載っていることである。またその1,000本の手にはそれぞれ目が彫られている。別に「千眼観音」とも称されるゆえんである。

立像・座像とともに、実際に1,000本の手を表現したものもあるが、「十一面四十二臂」とする像が一般的で、「四十二臂」は、胸前で合掌する2本の手を除いた40本の手が、それぞれ25の世界を救うものであり、「 $25 \times 40 = 1,000$ 」であると説明される。ここで言う25の世界とは、天上界から地獄まで25の世界があるとの仏教の考えが表現されたものだということである。

三十三間堂の坐像は、この十一面四十二臂像の典型的な作品であるらしい。42本の手の内2本は胸前で合掌し、他の2本は腹前で組み合わせて宝鉢を持つ。他の38本の脇手にはそれぞれ法輪・錫尺・水瓶をはじめとする持物を持っている。

堂内には、以上のような千手観音立像・坐像のほかに二十八部衆という千手観音の眷属が安置されている。眷属とは、親族や従者や配下の者など隸属身分を意味する言葉であるが、仏典では仏に対するさまざまな菩薩（成仏を求める修行者）を指す。東西南北と上下に各四部、北東・東南・北西・西南に各一部ずつが配されており、合計で二十八部衆となり、そのすべての像が安置されている。

これまでも、私は、京都・奈良をはじめとする各地の寺や博物館に仏像を見学するため足を運んできたが、今回の研修旅行で訪れた三十三間堂には心底圧倒される思いがした。日本の仏教芸術の粋を垣間見たような体験であった。

京都宇治茶

2部 日本文化学科
3年J1組 2809107 植木 文佳

2日目の自主研修で、京都の茶寮「都路里」に行ってきました。そちらで、大変おいしい抹茶を堪能してきたので、京都の宇治茶について調べることにした。

私が、自主研修で行った茶寮「都路里」の創業は1978年（昭和53年）で、若い世代がお茶の正しい淹れ方と飲み方を体験し、お茶本来の美味しさを実感していただけたらとの想いから祇園辻利内に「お茶飲み道場」を設けたことから始まった。道場の名前は「辻利」の名に京の都の「都」、四条大路の「路」、茶の里（宇治）の「里」をあてて「都路里（つじり）」と名付けられたという。

元々、宇治での茶の栽培を行ったのは京都梅尾高山寺明惠上人が梅尾と宇治で栽培を行い、当時は梅尾が本茶と呼ばれ、宇治は非茶と呼ばれていた。しかし宇治は、茶を育てるにはとても良い環境だったために梅尾から本茶の名を奪い、幕府お抱えの茶産地として発展した。江戸時代、幕府が使用する宇治茶は、毎年幕臣が使者となって宇治から江戸城へ運んでいた。これを宇治採茶使と称し、俗に御茶壺道中と呼ばれたもので、現在の宇治市街の大半は幕府が直接管理していた。宇治は、元々水陸交通の拠点として、首都京都攻防の要塞として、政治上極めて重要な位置にあったが、伏見城の新設によりその位置は後退したにも関わらず、依然として幕府が直轄した背景に、宇治のみ許された覆い下手法による、全国に比類のないてん茶の産地という特殊性があったのではないかと言われている。しかし、幕末の動乱によって將軍家と宇治茶師の関係が絶え、茶師は販路を断たれ茶園は荒廃して行くばかりであった。辻利の創業者である辻利右衛門は、この状況を見て、私財を投じて茶業の改善を図り、玉露製法を完成させるとともに茶箱を考案して販路を拡大し、宇治茶の復興に努めた。その功績は多くの人々に認められ、平等院正門横に銅像が建立される名誉にいたった。

今回行った祇園辻利も含め、現在日本の各地に存在する「辻利」は日本茶のメーカーとして卸売業を中心に全国の茶専門店、菓子メーカー、商社等との取引を行っている。本家



は今回行った祇園辻利ではなく京都府宇治市にある辻利一本店というお店である。辻利一本店は辻利右衛門を継ぎ、祇園辻利は兄弟である三好徳次郎を継いだものである。

当初自主研修では全く違う内容を研究しまとめようと考えていたが、京都の伝統的な宇治茶に触れて、京都では身近な存在ですが歴史の古い宇治茶を調べてみることにした。研修旅行全体でも感じた事であるが、京都は街並みが守られている事もあり、現代と古き良き時代が共存しているよい所だと思った。街並みだけではなく、食文化などを通してナチュラルに若い世代にも日本の文化を伝えられる素晴らしい土地であり、何度も足を運びたくなる所だと思った。



茶寮「都路里」特選都路里パフェ

註) 茶箱とは緑茶を入れる箱。辻利右衛門が内板に亜鉛の板を張る物を発明し、防湿効果を高めた。

鳥居の群れとカタルシス

2部 日本文化学科
3年J1組 2809137 長岡 真司

私は北海道生まれの北海道育ちだ。だから、津軽海峡を越えるたびにいつも思う。同じ国でありながら、こうも文化が違うものなのかなと。それが千年の都・京都なら尚更だ。歴史の深さという面では、札幌とは対極にある町と言ってもそれほど誤謬はないだろう。札幌は洗練されているが、どこか味気ない気がする。もちろん私にとっては大事な故郷なので、毎年うんざりする降雪にもそれなりの愛着はあるが、トンネルを抜けると南国だったなら個人的には諸手を挙げて享受するだろう。事実、関西国際空港に到着した際、雪化粧もせずノーメイクで出迎えてくれたことに私は歓喜した。やはりナチュラルな美しさが良い。北海道は雪さえもっと少なければ実に住みやすい土地なのだが……。

閑話休題。京都は高校の修学旅行以来だったのだが、当時は京都に全く興味がなかったせいか訪れた場所をほとんど覚えておらず、それゆえ今回、まるで初めて行く場所のような新鮮な気持ちで古都の門戸を叩くこととなった。成人した今では、北海道にはあまりない瓦の屋根や狭い道路、多くの寺社が点在する古い街並みを見ているだけで気持ちが高揚する。京都の伊根町の舟屋群を見学した際、家の屋根の軒下にパイプを半分に切ったような見慣れないものがついていることに気が付いた。本州出身の郡司先生に尋ねたところ、それは「雨樋」というもので、雨水を軒先で受けて地上に流すものだと教えていただいたのだが、そんななんてことのない生活様式にまで心奪われてしまった。

二日目に訪れた平等院鳳凰堂は、大学の受験勉強をしていた時から一度この目で直接見てみたいと思っていた場所だった。別に頼道の恩恵にあずかりたかったわけでも、極楽往生を願いたかったわけでもないが、なぜか衝動的に行きたいと思い、心の片隅で平等院に対する憧憬の灯は絶えることなく揺らめいていたので、念願が叶い、感慨深いものがあった。本尊の天蓋や池の水面に反射した鳳凰堂に魅せられたが、これほど雅な建造物が10円硬貨の絵柄にあてがわれているのかと思うと少々腑に落ちない。100円硬貨の八重桜か500円硬貨の桐花葉と交換してもほとんどの日本国民は文句を言わぬだろう。

この演習で平等院鳳凰堂を拝むことが出来ただけでも、私の中では大きな収穫を得た気持になれたのだが、自主研修で



訪れた伏見稻荷大社が、この旅行を更に深く印象付けることとなった。何百何千という鳥居が連なっている写真を資料で見て、好奇心を存分にくすぐられ、自主研修の日に必ず足を運ぼうと心に決めていたのだが、実際にその非現実的な光景を目の当たりにすると、くすぐるなんて生ぬるい刺激ではなかった。その時の私は、幼い頃に勸善懲惡の安っぽいアニメをわくわくしながら見ていた時と、同じ表情をしていたと思う。私のくすんだタブラ・ラサにも、まだ純白な箇所があったようだ。鳥居というのは神域への入口を示す門のようなものらしいが、何度も神聖な入口をくぐっていると、より深い神域へと潜行しているような、そのたびに魂が清められていくような、少々ご都合主義な高潔さに浸ることができた。鳥居は稻荷山の登山道に設置されているため、山登りをしていい汗をかいたのも、私が感じた清々しさに貢献しているのかもしれないが……。そして、恥ずかしながら、お稻荷様が穀物・農業の神様であることを旅行の事前計画を立てるまで知らず、それ以前は神社に祀られている稻荷神の使いの狐がお稻荷様だとずっとと思っていたのだが、この場所を体感したことで正しい知識を深く記憶することができた。稻荷神社の総本社として1300年もの間、多くの人々に信仰され愛されてきた伏見稻荷大社は、想像以上に神秘的で、私に癒しと浄化をもたらしてくれる場所だった。不精者な私でも、ここでは襟を正す気になる。いつかは厳島神社、伊勢神宮にも訪れたい。二拝二拍手一拝が趣味になりそうだ。

余談だが、研修中、バスガイドの方のお話を非常に興味深く拝聴した。関西の名所の見所や歴史を、非常にわかりやすく流暢に説明していたのだが、きっと沢山勉強をされたのだろう。今年は教育実習があるので、そのバスガイドさんの技を盗んで、授業に役立てたいと思う。



平成23年度 日本文化演習報告書

発行日 平成24年3月25日

発 行 北海学園大学 人文学部

印 刷 株式会社パスカル・プリントイング

